



明 18  
號 1989  
13

南北太平記圖會卷之十二

貳篇 目錄

藤房卿與正成閑談時世

藤房卿正成再論時世

彼修安鎮國家法

違勅命千葉三浦爭威

正成闇夜取邊栗岩

正成移兵攻飯盛城

正成揮泪斬小車妻正春

正成暗落飯盛城

開國諸將行恩賞

忠顯文觀誇賞事驕奢





廣有内裡射化鳥

修造神泉苑讓妖災

良忠誅殺足利兄弟

准后便傳貽護良親王

高貞内裏献龜馬

公賢公史例駕天馬

藤房卿因馬奉諫言

藤房卿重奉諫言

藤房卿月夜閑談正成

藤房卿遁世隱跡

勅而誅良忠已下候人

護良親王流刑鎌倉

南北太平記圖會卷十二

藤房正成閑談時世

藤房正成再論時世

藤房卿病と稱して恩賞の沙汰の奉行を辞し。出仕もなまごて居りひらく。折節は楠正成河内の国より上洛して藤房卿の閑居を訪ひ奉る。卿正成の對面て問ひひらく。天下を治る事異国本朝俱は世々異なり。今近きを見て申さば北條時政より高時に至て數代推柄何れも各々違ひ。是を以て見まはす。時天に在る時治る。乱る時ハ縦政を善くするも乱る。見の然ればあまがち国家の爲し心を尽さざるもあまがち。正成答て曰九そ天下を治むる君。九の品ありと古賢既より。其一ツは法を用ひる事厳重にして。唯其心奢の強きと。僂し心を尽さば是を法君と号す。漢土秦の始皇吾朝の雄畧帝是なり。二ツハ已て專らして政道を獨り断り。賢臣は不任是を專君と云。漢の宣帝是なり。二ツハ其君自ら理する事不能し。



政を其臣に歸せし。是を授君と云。燕の主噲是なり。四より勤勞て天下を  
 得る是を勞君と云。夏の禹王是なり。五より人の心を平して賞録を等しく  
 きて臣下と威を同じくす。是を等君と云。漢の高祖これ六より人民下あ若  
 く君獨上し驕る。是離折して亡ぶるを待たり。是を寄君と云。殷の紂王是  
 なり。七より敵を輕んじ。寇を奪て國亡び君死す。是を破君と云。吳王劉濞  
 これより。八より其國の城郭を全うして兵を利し徳を不修。これを固君  
 と云。漢土三苗智伯吾朝の平親王将門の類より九より襁褓の内より  
 天下の主として保つ。是を社君と云。周の成王これより。何事も品變むと  
 して大治をかつぐ。大治をかつぐ。則ち必むと亡ぶ。さまた世を治る人の心  
 によりて。質朴し賤きと文華をかざると。夏殷周三代のついでより  
 替るは。いと見えて改むれども。大治をかつぐ。必むと亡ぶ。是天の時り  
 あらば。唯君主の心より出。北條數代文質のついでより。これより貞時まで。

大治を改む。政道正直より。延喜天曆の古より及ぶ。○天下  
 しく治る。其家を失う。高時入道。至て大治をかつぐ。政不正我意を  
 専らして。色を好む。遊兵に耽て。猿樂田樂を愛し。鬪犬の遊びを樂し。芝  
 榮花より。一門を依怙し。佞臣を用ひて。諸臣を泥土の如く。あらむ  
 人の眼を重ぬ。故に。諸國の武士のつら。折もがれと思ふ時節。我君思  
 へ。立せらる。故に。渡りし。船を得。喜ひ。宦軍心を合。者多く。侍り  
 て。遂に高時亡び。天下一時に静謐候ひぬ。今たも。天下統一統の御代と成。事な  
 政正しく。上の情過と止め。無為を野ふる。民喜び。悦をか。此故に。民の  
 何を。役作の故を以て。民耕作の時節も。か。苛政を施し。此故に。民の  
 先代北条の世。遙に増。これ。慕ひ。思を戴く。亦世の  
 乱ん事を望む。今天下又累卵の危。あり。可練を不練。臣の道。あり。は  
 唯是公の御賢慮。あり。存候と申。藤房卿曰。君臣の礼。上じて。



唯其臣の心を知て臨み見其心は合せて仕る其心は合せて禄し其心は合せて賞  
 其心は合せて遠ざけ其心は合せて近づくを明君と云臣として唯其君の心  
 を知て敬ひ敬ふて倭をささげ其心は合せて事す其心は合せて進み其心は  
 合せて退き其心は合せて諫め其心は合せて不隱其心は合せて忠を尽し君  
 上は周き天の徳はして施し臣下は定まり地の徳はして受如斯天地の  
 位は契ふと明君賢臣の符合といふ君は其徳を盡し臣は其徳を諫むるを如  
 何正成答て曰く臣は諫臣義臣の二ツあり諫臣心を尽くし君明らうかり時々  
 諫臣の功なり君暗き時ハ諫臣の耻其諫を納し君これをを用ひらうかハ明君  
 はよく共進共退の練を納らよ君これをを用ひらうかハ時ハ或ハ退き  
 或ハ隱る是諫臣の道なり義臣はあつた死を思ふ代て其君暗味されば俱  
 暗味はて死を待其君高明されば其高明を守護す其身の勇義を失ふらんと  
 を耻て其君の暗きを恥とせば其明らうるを功とせざ唯非常を誠め鋒を

横へて敵と死を争ふを昔とせこれ義臣の道なり此故に范蠡は身退き伍子  
 胥は劔を伏て死候ひまこと申らまは藤房卿打伏向て涙を流さる正成も俱よ  
 涙を流さる藤房卿何故に斯正成事を尋らうかといふ若正成は君を諫むる  
 心ありば此人を棟梁とて功臣數輩申合せはよく諫言を奉らんと思ひ  
 らひらりふ正成練の叶ふまどきを知て詞理を尽くして如斯申らる間扱  
 は正成其身勇義の臣として諫むまどきの心ありと知らひらまは迷はれ詞を  
 てかく涙を流さまらるるを覺え又或は藤房正成を清待して終日難終  
 あり其夜は今藤房卿宣ひらる天下の主一人として數万人の上は備り天下  
 の民一人を敬ひて徳よかぬあつた其政はよく失事古より多し其失ふこと不  
 失といふ如何なる政といふ失ひ如何なる政といふ不失ぞ正成答て申様上禱を極て  
 下苦く国の勞といふらざる政といふ天下忽ち滅び失ふ上下樂を得て礼法正  
 仁義と專らうて民を憐む政といふ天下は失はば藤房卿の白必らば尤はと



覚の其昔秦始皇憐甚々色と好之民を若しめ書を焼儒を坑し其余の  
 暴悪をさざるといふ事なりけり。數十世を治めて威勢あつたり。二世  
 胡亥に至て其国亡ぶ。是始皇の失あり。一世胡亥の失あり。吾朝よて武  
 烈天皇の如き悪王無罪人を火をもて焼殺し。孕る婦の腹を裂悪くして  
 かなざるといふ事なり。このども無事ありて其身を苦めば。是を以て考ふ  
 る。治世の善悪。いさゝかざらる。佛説の因より果。報り外なる。止成  
 登て曰。始皇武烈唯勇奸はて是非の外之悪王の亡ぶる時あり。亡むる  
 時あり。但し天下草創の時。悪人は似たり。聖賢もあつて。兎角天  
 下を無為に治め民を安ぜんと思ひて治むる時。治むる。身の栄花名  
 利の為に治むるとも。治らば。藤房曰。萬物不定殊に天下を得て天  
 下を治むる時。時より来り時より去る故に運に随ひ變化し。乗じて天命の  
 まつふせんをよととまざる。其故に當今天下草創の思召さありて

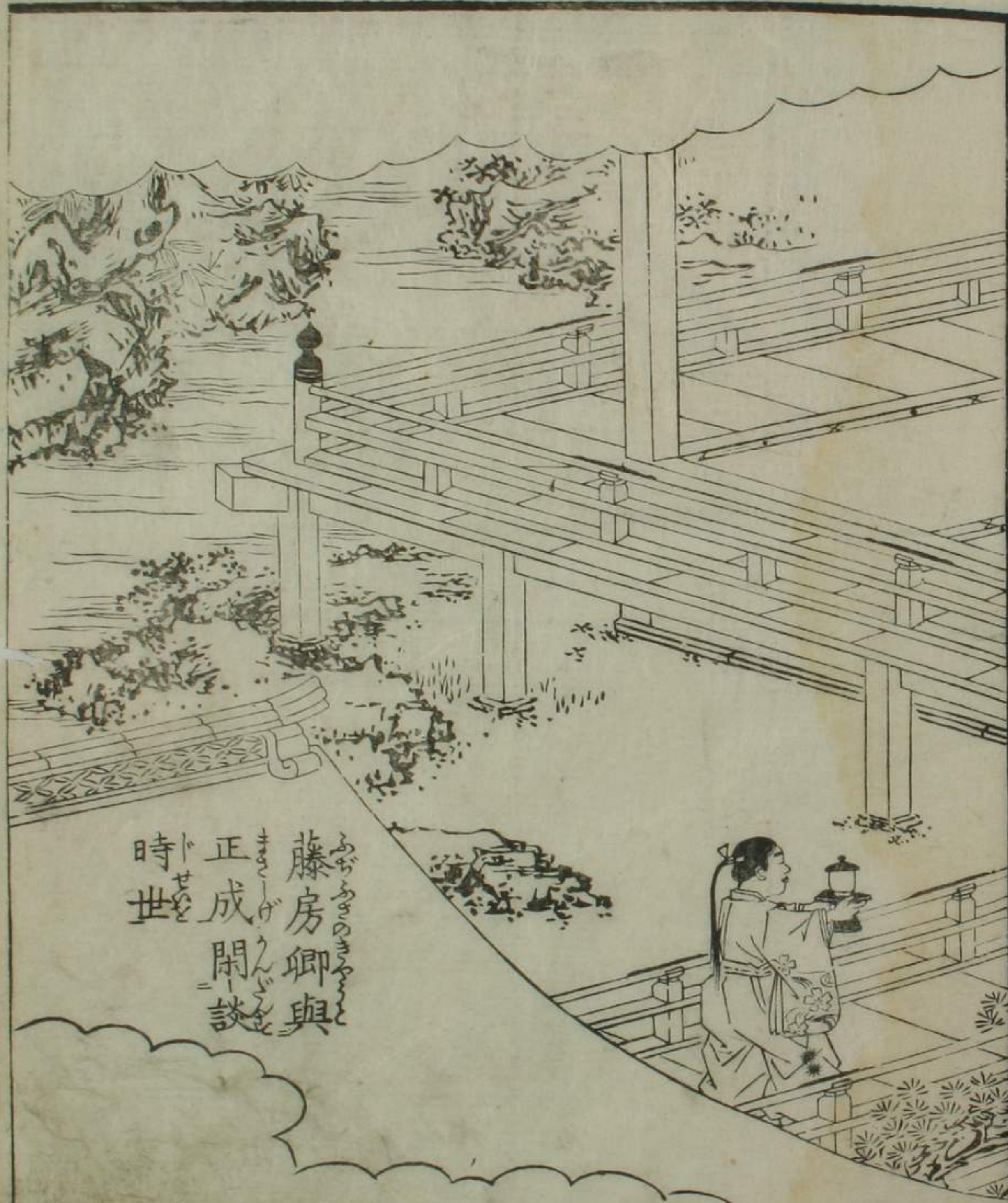
近臣と密に事を謀り。いさゝかざらる。時至らざらる。天下の大功をありひ。平隠謀  
 の人々皆罪を伏せ。今一人も生存する者あり。其後或ひは回り忠をな  
 又降人を出さる者。當時天下の権を柄。是君の失もあり。彼等が所為あり。思ひ  
 ぞ。唯天の自然と思ふ。なり。君を置。御座時天下速に靡く。君臣共思ひ  
 たり。君の隠岐國遷幸あり。我の帝位に配流せ。歸洛の志はかり。思ひ  
 よ。武家一時に亡びて。君臣再び歸洛る。是亦。是亦。是を以て  
 案する。萬事の皆時ありて。是非善悪。いさゝかざらる。思ひ。此事如何  
 正成曰。卿最もふ存め。昔より此支區々の説ありて。時よりあり。よ  
 らざらあり。善悪より事あり。唐太宗李靖を召て軍法  
 を問う。李靖答て曰。天官の事あり。時日の事あり。明將の法とせ。周將  
 は是を抱る。太宗曰。明將天官時日を不用といふ。始より天官時日といふ  
 及び天官時日用ひて。益あり。明將これを法とせば。この事非



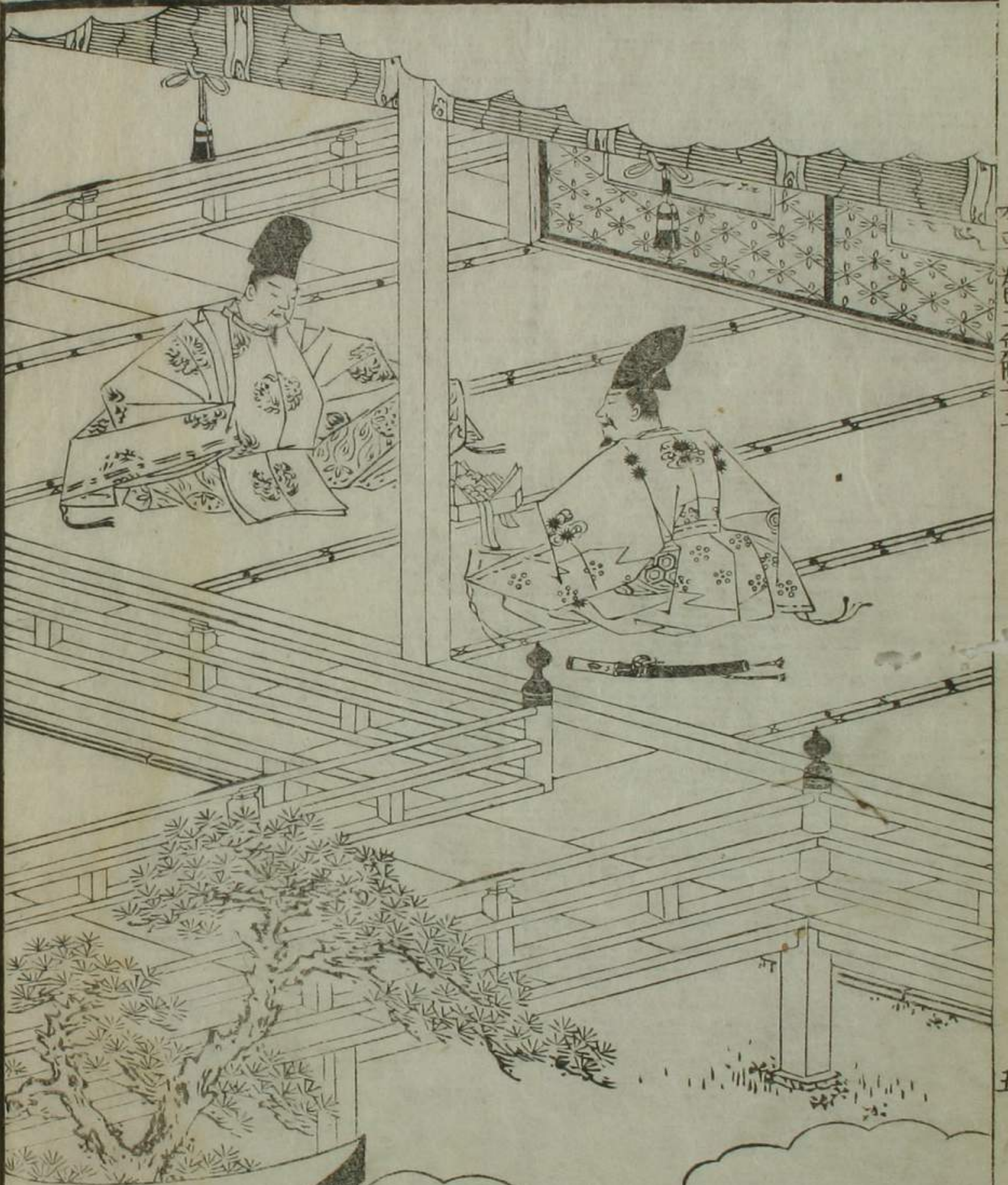
あり此二ツを如何李靖が曰昔紂王ハ甲子の日ハ敗れ武王ハ甲子の日を以て  
 軍ヲ勝り甲子ハ天官の時日の一徳あり然るハ殷ハ亡び周ハ興る是明ハ天官  
 時日を用ひて敵を亡くすの二ツあり又宋の武帝往亡日は軍を起す軍吏の曰今  
 日ハ往て亡ふの日なり軍を出すと事よろしからず武帝曰我往て彼亡ぶ何ぞ  
 不軍といふんや則ち兵を率ひて打向ひ果て敵を亡くすこれ明將天官時日を  
 不用して敵を亡くすの二ツあり明將ハ天官時日を弁も能捨取ハ能取棄る時ハ法抹  
 時ハ專ら以て閻將ハ天官時日を用ゆる時ハ用ゆる失あり不用ハ用ひざる失有  
 故ハ是ハ抱る所の此二ツを以て知るべしと申す也太宗深く是を昔ハ  
 然るとぞ又春秋の時燕國樂毅を將として齊の地千里七十余城を攻取齊の  
 將田單僅ハ即墨の二城を保つ事ハ至る所と申す也是を拜して計ハ  
 問異人の曰燕破るべし田單覺て火牛の計を用ひ大ハ燕の軍を破り齊  
 地千里七十余城を復す是ハ兵を起す時已ハ變の萌在て始て變を定るん

周の殷を亡すハ常より是等と以て分別しうべし太宗曰太公望ハ著龜を燒  
 て付て亡し宋武ハ往亡日ハ軍を出して敵を伐田單ハ神の怪かり託して燕を  
 破る是等二ツの事異るらん何ぞや李靖曰事異るらんといふも順逆の違はして  
 其機も一ツあり是則ち明將ハ法とせば法ともる時ハ善用ひ弃る則ち能  
 捨ると申すなり是ハ兵法の詭道也と答ふ太宗深くこれを昔ハいふは是  
 等の兵の道ハ急務一ありん天下兵既止則兵の心を專らとかなし時ハ兵再ハ  
 起るや天下兵の起る時靜謐の心を專らとかなし時ハ敵の為ハ靜謐  
 せらる者なり是等の吏深き心ありん今數年の乱後諸民の疲勞  
 をいともせらるる大肉裏の造營を被仰出所ハ諸卿阿て臣ら道と尽すは  
 是を議奏せらる吏朝廷ハ賢臣かき故もあつらん貴卿諫を納めんと  
 ころも主上用ひらる是天下の不幸と申すなり乱近きもありされハ兵  
 を能くするものを乱世の英雄靜平の女賊といふ是太平の時又兵を好む故





藤房卿與  
正成閑談  
時世



太平卷二第百十二



太公望ハ殷の乱を静めて。周の世を治め。范蠡ハ呉を破つて越を退く。俱一匡を  
を得たるの賢臣なり。如斯人今の世にもあつて。君用ひのふらざれば  
其臣其徳もさふ似たりと申す。藤房卿涙を流して身の不肖を恨む  
と宣ひ。正成も涙を流して。御晦申上て。我國こそ帰りたま

被修安鎮国家法

遣勅命千葉三浦争威

筑紫は故探頭。英時が猶子。規矩掃部助高政といふ者あり。同一族。藤田  
左近将監貞義といふ者。此高政を取て前亡の余類を集め。所々の逆黨を招  
き。其勢三千余騎。筑前と豊前の境。帆柱城に取奉て。旌を立てる。同は意  
の者三十七人。山鹿。筑前守政貞。弓削左兵衛。佐清。常宗。藤兵衛。直盛。佐  
杉右馬助。近忠。原源五。公定。府著。喜久。直其。余末。の輩。勝計。あつた。  
又隣郷小倉津。城を構へ。長野七郎貞安。抽扱士。内といふ者。千五百騎。よ  
て。揃籠り。是も高政の志を通じ。宗像大宮司の二人。敵の勢の重らぬ

前責下。て。俄に手勢討つと催し。千五百余騎。あつて。押寄が思ひ。長  
野貞安。後討勢。つら。出。故。本國。退。因。高政の勢。ハ  
弥強。大。一。族。藤田貞義。黒木。同。住。野等。を。語。り。現。後。國。三。池。郡。堀。  
つ。町。城。を。構。へ。二。千。余。騎。よ。て。揃。籠。り。物。柱。小。倉。と。共。其。是。の。勢。を。互。互。其  
難。と。助。け。し。右。亡。へ。見。え。ざ。り。夫。の。こ。ろ。伊。豫。國。小。倉  
故。赤。橋。武。藏。守。守。時。が。長。子。駿。河。太。郎。重。時。と。云。者。先。年。の。余。類。を。驅。催。か。立。鳥  
帽子。峯。城。を。拵。り。四。辺。の。庄。園。を。掠。め。横。領。も。或。ひ。又。故。大。佛。陸。奥。守。が。一。類  
大。佛。藤。太。光。正。と。い。ふ。の。去。年。千。早。破。の。寄。手。降。参。り。甲。斐。ま。く  
被。誅。く。大。將。の。即。後。又。ハ。宗。徒。の。者。ど。の。此。事。を。念。い。あ。り。か。を。語。ら。ひ。故。高。時  
禪。門。の。兄。弟。子。出。家。し。て。佐。目。憲。法。僧。正。と。号。し。西。大。寺。の。中。に。あ。り。し。り。つ。を  
大。將。と。仰。ぎ。亡。魂。の。恨。を。散。せ。んと。此。僧。止。は。帰。俗。を。せ。り。相。摸。左。衛。門。助  
時。光。と。名。乗。せ。忍。び。く。軍。勢。を。集。め。り。和。州。の。筒。井。淨。春。紀。州。の。牧。野



庄司を始めと。武田十郎兵衛清五郎十市佐兵衛河村右近丞月谷主殿助  
 若田孫右衛門等是は共むり者二十三人其外関東の余黨此彼より弛集つて  
 其勢一萬八千余騎始和州辺粟旗と擧ぐる其地を過半攻難けて其  
 勢ひ強大なるは随ひ河州飯盛山の城を責取て彼は移り猶河内国を平吞  
 せんと欲するも河内相の領地して宗徳の良臣所々の城を守り防禦  
 の備へ堅うりしう。容易に犯し得ざりたり。去程は三箇所の早馬急を  
 告て都に注進申すまは此等の凶徒武力の上は法威を加へて退治せんとんが  
 早速に静謐にがらうとて。俄に紫宸殿の皇居に壇を構へ竹内慈嚴  
 僧正を被召て天安鎮の法を被行くる。此法を行ふ時甲冑の武士四門  
 を堅め内辨外辨近衛階下は陣を張り伶人樂を奏する始武家の北軍南  
 の左右に立雙び。劔を抜く四方を鎮るの按あり。四門の警固ハ結城親光捕  
 正成鹽谷高貞名和長年也又南庭の陣は右の備へ三浦久義方左の

備へは千葉大友貞胤を被召くる此兩人兼て其後隨ふべき旨領承  
 申奉るべく其期に臨んで互に左右を争ひ三浦の千葉が下ふとん憤  
 り千葉は三浦が下ふとんを忿て。俱は出仕をせらるりたる天魔の障  
 法會の達乱と見えたり。後は思ひ合はるる天下久しく無為なるまはき  
 表尔也とぞ知らるる。此法の効驗武力を助けたりや。筑後堀  
 口の城へ大友八千余騎よて押寄城を責る事三十余日して貞義巴下の軍  
 を亡し帆柱の城へ小貳宗像大宮司其勢二万余騎よて押寄六十余日して  
 高政を始め興力の輩を滅しるまは小倉の城の長野貞安ハ降参をせたり  
 かり。正成其已前和州の朝敵辺栗に在り時急ぎ本國より告来りしより  
 早速二條関白兼大將の御許に参りて申上奉るる。和州に朝敵蜂起  
 仕りしより承つて候ぬ早く注進を賜ふ其馳向つて退治仕りひく。若延引  
 仕り候中。敵諸方へ引合はる。由じき御大事よ及びめしと伸るるまは。



殿下聞召て奏問をへりて宣ひけり。月の宴花の御會は事過て敷日  
 を送りせり。楠後京都滞留る間、敵飯盛の城を責取りける程  
 經朝敵退治の御祈りとして大法被行は因て楠も其驚固の事と如斯  
 勅定ありたり。正成畏て承り則勅答被申り。御祈りの後人正成  
 別は人も侍候へ。朝敵帝都近きとて城を構へ万民を悩む事以の  
 外の一大事と存候。幸ひ正成存知の国よゆ。何とぞ帰国の御暇賜り罷下  
 て退治仕度赴き奉願なまば。敵聞あつて大法御祈の行ひ結願及び候  
 り。正成速くは帰國て退治可仕と被申り。程は正成此上ハ力不及して都  
 留りて急ぎ早馬を以て本国の宗徒家子良後下知と傳へ城への用心を嚴  
 しく申附。又思地左近太郎は密謀を申遣り。一々思地則ち領兼して使  
 以て飯盛申送り。根がゆゑ兵を集め國家を悩む。又思地意を  
 申かぐ。退ひて事の意を案し。侍らよ。又御理りなきはよ。あはれ。故高時

入道殿先祖の行跡を達して。心の依りて天地のあみは。天下斯  
 こも成侍れ。不思召哉。今先祖の怨心と息人が為し。御旗と被奉の段敵な  
 ぐ。感入たるあり。定る御討手。正成罷向ひ侍り。合戦ハ運の窮達  
 可依候へ。兼て申が。下民は咎あるまじ。さ。其下民を悩乱さる兵  
 糧は事と寄。遠境を被奪の條心得が。諸民の恨み我程ある。軍  
 軍勢は堅く被仰付乱妨ある。御互は領國城壘を争ひ。理世安  
 民の為こそ侍らんと。似合。御用と承り。申て米百石樽五十  
 荷者十種を送り。飯盛城中の者も。例の古狐が何事と仕出  
 つ。唯其使切て捨んと申り。大將憲法を始め。宗徒の令のや正成  
 武畧右て。道は違ひ。男なり殊は情深き。故は民の悩乱を悲  
 みて。斯ハ取計ひ。其上元弘は。大忠あり。者を今さま。の忠賞  
 も。な。君を恨て奉る。心も侍らんと。親しく礼答して。その使を返



より正成軍慮は賢き故に此使を以て城中の様子勢の多少を見つゝせしむ  
あ軍の期を延し三ツの下民は迷惑させまじき事なりと後三ツあひ  
知らまじき事なり

正成闇夜取邊栗砦

正成移兵攻飯盛城

禁中の法會事過りまじき正成討手は罷向ふと仰出させしむ  
楠五百余騎にて攝津を経て千早破の本城へ歸りたり又思地左近  
を使者として飯盛の城へ申遣りたる様は各々の討手正成は被仰付候  
弓矢取身の習ひ親を捨て主命は随ふ事往昔より法にゆへ中  
是非を申さず不及さるる斯旗を立ち事家の断絶を無念は被存  
候条余義不可有之最の哀存ひ若公家武家御合鉢の心もわづらひ自他  
目土安民のため可然事のみ思召あは正成御使可申あてい先京土産の傳へ  
と持せ進候なりと樽酒十種を贈りたる大將憲法列座宗後の輩

仰承りひひぬ如何様申談の上自是御返事可申候とて厚く礼答し  
思地左近太郎を致待してぞ歸しける思地養應の間は古より親しき  
武田十郎兵衛小出合さめぐの物語をいひあつた言葉の中敵の強弱を討  
又供廻り申付て城中固の様子勢の多少を見はめしせま歸つて正成り  
委細を物語り此城落安く右に申さるる正成一聞取て莞尔と打笑ひ  
詰りて見透し申されし忍者の申し少くも違はぬ扱邊栗の陣は敵  
幾程うあぶさかと問申されりまは即後古市右衛門進出て申様砦の大將  
千市左兵衛佐よ其勢九五千余もあると諸率の陣家九四百余守と見  
積りて吞み正成則ち千劍破し歸りて翌日戌刻は陣解し今夜辺栗の砦  
を可致し基子の上刻は打出し舎弟正式先陣とらる和泉州後陣とらる  
と命を下し又密り志貴牲川西川を召て各八幡子多門丸を守護し寅の上  
刻は雷城をまき来らるし申さるる其身の中陣六百余騎後陣は和田八百



余騎先陣正氏八百余騎都合其勢二千二百余騎ふの過ぐりたり。志貴思地の  
 何故小勢あて向せうふぞと申るまは和殿達八尾殿某が手の者を集めひつ  
 六千余騎は右へきかれぬ跡心えわくとも不存と云弁てぞ出たりたり。卯月廿  
 九日の夜けりるまを。目指もあつる園ありとて。正成松明を不用道の  
 案内を建め前後を助けて道を急ぎ辺栗よ着る所寅の下刻なり。正氏が  
 手の内よりありたり木子兵太といふ忍よ百余人の歩立と差添密よ敵の陣  
 野へ忍ひ入てたり。正成は正氏が陣を六町退きて兵を備へ和田は正成が陣を  
 二町退きて陣を堅うは楠八十余人の足軽よ早松明を三抱あてよ持せ。和田  
 が陣の後の嶺樹本茂りたる林よ懸て。二三百の松明を一度よ點させ。正成  
 が陣よ太鼓を打とひて。先陣の正氏が五百余騎鯨波を奉て葛地  
 小敵の砦よ乱き入る。敵はきのふくは追正成は都よ在ときじうて今可奇と  
 へちりひもとつば。何事ぞと周章強て向ふの山を見まは數百の松明

輝きたり。園夜を昼よ替りたり。氣あくれを戦ふと不能右往左往  
 又散乱して討る者數をあつた。偶備を固めて戦んとすれは楠が入るより百  
 人の忍の者此彼よ穴を懸て。前よ頭れ後よかまを切廻りたり。程小怒萌れ  
 成て一支もさへむ。砦を捨てて逃たりたり。正成は陣を固め先陣後陣を乱  
 して敵を追ふと一里余つりて。立歸りたる夜はあつる。明りたる。斯處志貴  
 左赤門六百余騎して先陣に進。中陣は楠が嫡子多門丸宗俊と後二千余騎後陣  
 は柱川六百余騎寅の上刻よ千劍破をちて。辺栗まぐ六里の道を外の下刻りぞ  
 着たりたり。時よ多門丸八歳の童ありとて。少しもあつる。ひるる気色もなく。物  
 具さつらう。馬よ打乗て来りたり。正成多門丸が手を執て早くも来り申さ  
 れたり。和人の子なぐも。連上の上の御用よも可立人なりと。泪を流して被言りつ  
 後よ帶刀正行と名乗。此多門丸が事なりたり。正成何故多門丸を召寄りつと  
 つよ。自然翌日敵大勢よ引返さんよ。御方終夜遠路よえ来て相働らる何



是勞まじし小勢うれは戦ひ危ふくして謀て荒午の為は石よせたりなり。辺栗既  
 は落城せしうべ田原勝田二百騎を差添てこれを守らせ直ち千劔破し引下て  
 人馬の息をぞ休めたる。飯盛の城中めい栗軍ありと聞て兵を出したる。邊  
 栗已し落城のほを聞て三荷新庄の辺より速は引歸したる。正成飯盛より兵  
 を出せし由を聞て俄に翌日千劔破を立く。飯盛は向ふ其勢凡そ六千余騎あり。  
 先陣又宝寺に進めば正成の伯の寺の城に看到す。其夜の和田志貴猶原の三人  
 三千の兵を差添て。飯盛の城下前後は伏至自ら三千余騎して。故奥寺は陣を居  
 野伏五千計に兵二百人差添松明を持せて三軍に分城を隔る。二里よりして  
 大勢陣取の跡を見せたり。是は敵若夜中かぐる兵を進め来りば伏勢を以  
 て其後を取切せ自ら其際又城をのりてとんと縁にかり。城中より是を見  
 大將憲法兵を下知し。楠のまゝに陳所を取ざる間は懸ちりて足を留さ  
 せり。いと申るまは清の五郎といふ老功の者ありたり。味方のいと此

地不案内なり。敵は自國して夜中まぐる能案内を知。其上楠が矢取ての名  
 将たり。味方夜中し寄なると斯くして勝べしとの謀のなるともや。明  
 まさき夜よても侍らぬ。夜明て後得と其虚実を偽り。戦ひつるべしとの  
 言まはる。若き輩は何条楠陣も何程の事のあるまは。何人少く賢きとてや  
 あん唯打出んとひりめさるる。河村右近丞といふ者進出て思ふは楠大軍  
 あり。白昼しよとて。夜中し陣を構ゆるとも小勢うるをあらせし。まは  
 かり。今御勢を過半城に残され。五六千の兵を以て不意に懸ちりし。うら  
 と云くまは。諸勢此義は同じ。河村加地と大将とて六千余騎直ち小城をぞ  
 出たり。楠の細作此勢に紛きて城を出急ぎ此由を申され。正成は  
 此勢討べし。味方の野伏を敵は追ちる。松明の散乱すりを見らる。城  
 中の兵は不残出べきなり。其時我等引達し城を乗取べき。此由早く和田  
 志貴猶原の陣へ通どべき。いと急ぎ軍使を遣はり。和田正遠は



軍使の至らざる已前、敵の鯨波はあどろき、何れも時を急して早合戦に及び  
 たり。正成是を聞て、あつや計相違して、城に残り大勢打て出て、狹討にかな  
 ず。あつや和田の討死を聞き、たゞひ城を落し、和田を討せて何れせん城の  
 重て落さざれば陣より、時の声を奉よとて、三千余騎一度、時を奉よとて  
 加地河村の六千余騎、是を驚き、己より引色は見えり。楠深き慮りやあり  
 たり。これを討むとて、三千余騎と三千余騎、筋達し、押出し、野伏と一千あり。和田  
 陣へ使を立て、相圖相違ある上、敵を長く追はせ、夜明け前、我陣に來り  
 べしと下知して、佐田の社を後して、陣を立、夜はあつやと、曉はり。和田  
 のあつや、打勝て、六百余級、首を持せて、立帰りたり。加持河村の輩、楠が  
 筋達し、押出し、あつや、恐む、城中へも得入り、散り、成て、逃りたり。城  
 中へ残り兵ども、中へ城を出ん、思ひ、あつや、凄じき、陣の声を、急き、誥  
 を堅め、上と下と、強動し、夜曉て、あつや、敵一人も見えず、何事ぞ

軍に、あつや、今更討むと、敵も、何故早く引取らん、不審とて、人を遣  
 て、其邊を窺む。伏兵の跡あり、あつや、弥驚き、此後、一人も城より出る者  
 なく。楠の陣より、諸良、打寄て、評定、あつや、恩地が云君の御陣より、陣を  
 急し、あつや、あつや、城の兵悉く出べし、和田殿を救はん、為、陣を揚らまて、正成  
 曰、實は然、此城長く落さん、諸國の朝敵、弥蜂起して、由は、大事、及  
 ぐんと存むるな、和田殿被討申さる、陣を急せ、城を落し、あつや、百  
 日と、あつや、容易落さ、城あり、故、和田殿を討せて、何れせん、存ト。  
 城中を驚さん、為、時の声を奉て、思地が曰、我も存、併、御陣、小  
 陣を奉り、一時、敵の陣を許し、城中も、震動、相見え、急、城、御  
 取懸り、あつや、必、責落さ、あつや、急、引上り、如何、正成曰、退て、後、我等  
 も、尤、存、其、時、和田を助ん、あつや、ひ、故、心、付、あつや、名、將  
 なく、其、夜、城を落し、あつや、正成將の番、あつや、故、園、あつや、尤



取しつと被申る。其後さましく謀りて城兵をあびさ出さしつと。己前  
も手懲り弥要害と構へ厳しく守る一人も出さるるまじ。楠も夜討小まじ  
街もなぐつと。よ日とぞ送りまらる。

正成揮泪誅小車妻正春 正成暗落飯盛城

楠八尾別當と誂どて。十人の忍びを城中へ入るる。大将憲法備嚴るる故。八人生  
捕耳鼻をそぞろ捕ら方へ追返す。却て城より忍びを入れて八尾別當が陣に火矢を  
うけ足輕二三十人打取て手早く引取らる。八尾別當腹に居る。此儘るる山の小  
城上るよ易き事なれば是非力責可然と申るまじ。正成判りて申様我義  
兵を起しつと。より。處々の戦場を經るまじ。憲法が如き者を不見彼が  
軍を深く其法を得る。今日御待の城を可落手術あり。今なまじひあ  
る軍し味方と損らるる。別當正成が詞心し落さる。け  
り山や手勢を率しつと。其俵飯盛の麓へ押寄らる。敵中の城に置らる兵を

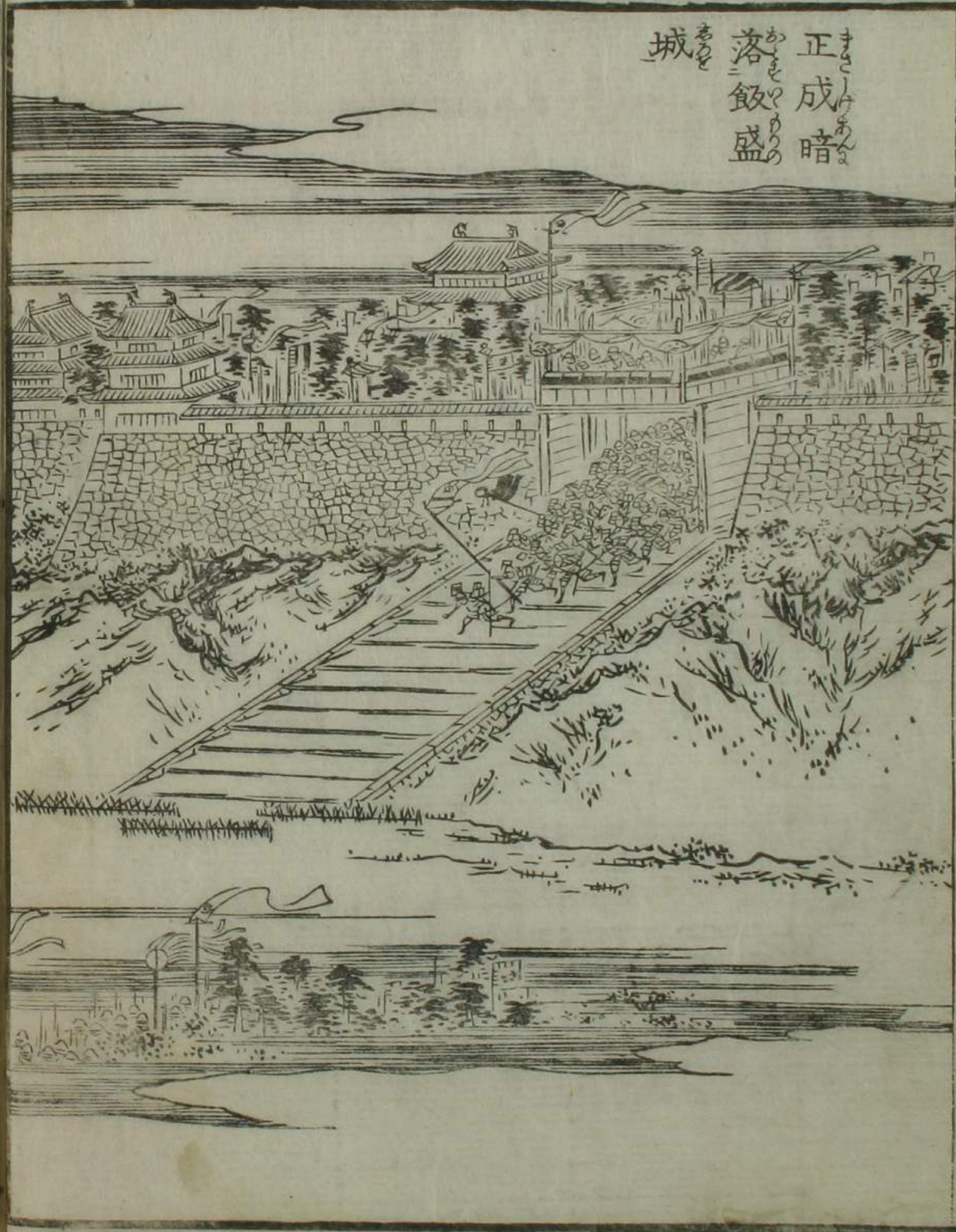
出して戦ひつと。別當利と失めて我陣へ引退く。正成是を見て心怒り去  
はつと。軍と出し難く敵を城へ追返す。別當小對面して申らる。此程憲法  
が數日の振舞ふあは。御方の忍びを生捕却て敵より忍びを入れて陣を焼く。又今日の  
戦ひ大勢の人数を手足の働く如く早く引上るありまじ。待らる城を出る  
思慮一つとて因を不失是良計なり。惜哉。即ち失ひ時は遇されば切に成が。正  
正成此陣に向ふ上如何。此城を可落らる。左の御方の小勢を敵  
小看すまじとて。六千余騎を三軍に分十一段に備へて城近く押出し。種々謀る  
し。敵さる小城を不出正成思慮を運り。已う家人高島才五郎と云者を  
傷て城中へ回忠を為致らる。始の程に誠とせさる。次第其因を不致  
と。内通させらる。心解く。或日城中より二百余人の兵を高島が陣へ  
遣置軍半か。時陣中よ火を懸べし。隊を合せ。城中よ五千の兵を残す。  
一万余騎し打出し。楠に待ましけらる事あれば。支々の備を固め互ら



矢合せし戦ひを挑こく高島才五郎軍半と思ふ頃相國を不達陣屋よ  
火をうけりて申合せれば捕の良後ひりくと高島の勢を追取  
偽て高島と生捕城中より遣置る二百余人の勢を此彼追詰て悉く取  
る敵かたし勢もあはれ大の起しを見て弥競め責かき捕る  
陣も少く危く見えたりける正成の所の小川を前當て一段高き岸陣と立て  
居りたりける敵會釈もなかり河中へ乱入るこゝの岸へ上りんと仕たりける  
正成射手と下知して散り射せしむ野に忽然として  
捕る伏勢時と咄と作て敵の歸り路を截切大将憲法が備は切入りて忽ちよ  
打乱して死亡其數も知ざりける大将憲法大に恐る一方の血路を閉まり  
小捕が勢跡はすて追詰る程にまて影を討て陣城を急ぐる然れ  
ども正成統て城を不責軍を手軽く引上げて人馬の息を休めける時は恩地  
正成と見へし申ける殿今日の御戦ひ是程に敵を追詰何故つて城

へ取かりてはどりや統て責懸りける必死城の落ひきあり正成曰は落り事  
あが又遁るまじきを志し一致に成る落らざらば増てや城は五千の  
荒手あり味方の已ふ方と通り一日二日延りとも見課せざる軍とて  
何ものせんや思地が曰仰ふて候へども夫の御方の運の利ぬ時こそ待ら  
ぬ今日の如く運の利する軍は少く危くひとも勝に乗て戦ふ勝物一ひてや  
其上何も宜ふ如く一方を明て三方より責詰みつゝ何れ敵落せと云と  
あはれず許より敵取集勢あてひて平や假ひ一人の賢者ありてつてと  
一知し申も通れぬ取あり死を交してあせりて定て敵今日の戦ひはつれ  
ぬと速は戦ふは利ありと義を薦切る者も御方危きと憂ありて城中  
は誰一人夫程の名將侍もなきやと申るに正成とて手を打て申る条  
一々義を當て感入ひ定の勝を不定と見誤りて今日の軍も亦國をなげに  
責む容易落つりめの向後多門丸が事其許り預け可申也と約定銀





正成暗  
落飯盛  
城



一振千余貫の所領と添てど賜りたる。諸大将も是を見て感涙を流し恩地を羨やまざる者なり。斯る中、和田、和泉守が舎弟、小車妻、新三郎、正春、櫻州、尼寄より密に女を召よせて愛せらる。正成三日目、是を聞て、兄、泉州が許へ使を立かゝる。不思議あり、定めて御存じ有間候。某、兼て軍法は其罪科不軽趣と申渡し置ひ。其許、舎弟も、斯無法、みゝるも、復、偏に、當家運の尽くる所。正成が子ありとも、軍法を破らば、罪より行ふ。但、御刃の胸中承りし、いと申は、はるばる、和田大に驚き、正成が本陣に來り、怒り、某、不存の弟と侍る者、龍、様、無法、い、復、諸人の見聞取入ると、罪科以て重く。宣く、御按の如く、被行候べしと、恐入て申し。正成、打點さして、能くそ、宣ひ、は、此上、取帯を、没取、と、さ、り、いと、被申、は、り、は、和、田、重、祐、を、隱、使、の、御、取、計、先、以、て、存、存、の、去、某、な、り、は、一、類、の、門、兼、と、被、呼、末、座、の、塵、を、拂、

身と成て、洪恩報さるる物なり。舎弟、是、然、る、り、女、色、を、耽、り、て、法、を、乱、し、事、不、便、ら、る、も、死、罪、に、可、被、處、事、と、存、ひ、左、は、あ、ら、ま、た、御、按、嚴、う、ら、間、と、さ、哉、と、伸、り、ら、る、に、正、成、頻、り、と、泪、を、流、し、尋、常、の、法、に、あ、ら、何、糸、尤、ま、ぞ、の、妙、法、に、及、ぶ、ま、や、少、く、あ、れ、軍、法、を、犯、さ、事、ハ、味、方、敗、軍、の、端、亡、國、の、基、よ、り、也、一、人、の、親、を、以、て、万、人、を、替、へ、る、に、已、事、不、得、と、小、車、妻、を、死、刑、に、行、ひ、ら、る、。され、常、に、情、あり、て、下、を、憐、し、む、も、軍、法、を、破、る、輩、を、免、さ、事、か、し、此、小、車、妻、ハ、和、田、一、腹、の、身、に、て、正、成、が、妹、の、子、な、れ、猶、子、と、和、田、楠、家、一、陣、の、大、名、ふ、か、ら、威、重、し、と、い、へ、も、其、罪、を、ゆ、つ、ら、る、も、良、後、諸、率、俱、に、帰、服、し、て、取、て、法、を、犯、さ、ら、る、が、故、小、或、夜、陣、中、は、失、火、あ、り、な、れ、も、諸、軍、法、を、守、り、て、少、く、も、乱、さ、る、に、却、て、其、夜、飯、盛、の、城、を、責、落、し、け、る、其、始、末、を、尋、め、り、は、志、貴、左、志、門、が、士、率、少、く、の、辛、過、ち、よ、り、陣、所、は、大、燃、出、り、し、小、志、貴、が、一、典、の、勢、む、ら、り、火、を、防、ぐ、懸、り、諸、手、陣、の、輩、ハ、物、具、を、固、め、大、



將の下知を待りたり。正成すつや今夜こそ城を乗取べしと恩地を先陣と  
 して二陣三陣次第は操出りて城間迫りて出らざらん時節瓜あて  
 きて正成が本陣も火移りたるも少くも不動諸手の雜具悉く焼  
 失りしとも。正成其料を可償也各神妙なりとて時の至るを窺ひたり。  
 此時城よの楠が陣に失火ありと見たりとも若謀計めやと疑ひて  
 ありて詠めて居たりたり。火勢益烈しく已に楠が本陣も火の移りたる  
 を見て扱ひ謀りてあざざりたり。のぞ此處に乘りて敵を破るべしとて大将  
 の下知をも不待皆我先に駆出たり。大将憲法是れをも何事ぞ腹は  
 と制しども耳も更し閉入ざらん是を看ん為りて是非なく馬を  
 出りたるは城に残り軍兵も大将出たり上りて思ひくふ一語かけあて  
 出たりたり。楠が先陣恩地満一ハ千余騎を二ツに分侍り分けたり事なれ  
 ば矢一筋も不放出と叫んで備もなきざる敵の中無二無三は切入り當りて

幸ふ難立ちたる。正成の本陣より太鞭を打てこれを捕けたり恩地二軍を乱  
 して逃るを追軍を乱さばして其跡を結なれば敵返り合あ軍もあはれて  
 散り小成り崩れ行。正成中々和田正遠舎弟正氏も兵を乱して追て下  
 知りたるは四千余騎の軍勢備を乱して追蒐る。城兵は余り手繁く追て  
 らも己が拵り逆木を支へられ操合り合大半は入陣不能とて四角八方に  
 散り恩地の正成が本陣へ軍使を立今夜城を取結可申哉と申せりたり  
 小正成兎も角も恩地殿の謀ひとて返答申されたるは恩地の物言  
 御参りたるは五百余騎北の敵め目も不懸城際迫り馳せりて大言声  
 ふて呼りたり。城外より首を取るるは高名小あは後日忠賞はと  
 て。當手の者を恨むるは向ふ敵あり討捨りて早く城に弛り能敵  
 を組討べしと追甲御方小下知も傳へ自ら一番と進んで城へ取詰り  
 れバ門を明て番の兵一人もな。扱て直ち弛入櫓は火をかけられ



城に残る者共思ひくは腹掻切て死ぬもあり。又路を求めて逃るもあつて。敵盛  
 の城一時に平定しつらつら。大将佐々目憲法時光討死あり。又落きて  
 其存亡をあらざるも申らる。正成へ一千五百余騎して静に入城し暫くも  
 足とてめをも傍らる山陣を堅め夜明けまで首四千余級切りけ。猶残  
 黨を尋ひて討取國中安全よかたうが為は舎弟正氏和田思地等と飯  
 盛に残り置正成の其日は都へ登つて来

開國諸將行恩賞

忠頭文觀等賞事驕奢

此時伊豫國三島帽子城より北條重時土居得能が兵と支へて居つらつら。  
 筑紫河内の朝敵已に亡びぬと聞えつら今親かりつら者も忽ち約を交  
 して敵よりつらる程自ら城に兵少く成つら程土居得能時と得つらと二  
 万余騎して寄つらつら三日も経つらふ初より被頼つら金子五郎左衛門  
 敵に味つら土居が兵を城中へ引入つら。直時良後十八人自害つらとて失つら

うく南方西海已に静謐し及びつら。筑紫より小貳大友菊地松浦の者共  
 大船七百余艘して参洛つら。此外國々の武士足利を始と一人も不残上洛  
 せつらつら。河京白川に充満つら。王城の富貴日來百倍つら。諸軍の恩賞  
 先達て被行つらつら。夫々半端ありて止め是等の猶あつらつら。延引つらつら。  
 先大切ある輩の抽賞を被行つらつら。足利治大夫高氏と弟一の功とて  
 後三位は叙せつら。武藏常陸下總の三國國を賜り。右馬頭直義。下遠江の  
 國を賜り。新田左馬助義貞。播天下野。月子息義頭。越後義貞。舎弟  
 兵了少輔義助。駿河楠判官正成。摂河内名和伯耆守長年。因播  
 伯耆殿法印良忠。若狹但馬。結城親光。下野菊地。肥後小貳。筑前  
 肥前豊前大友。免後豊後。被當行其外。松浦大宮司。土居得能。が輩皆大  
 々領國を賜りつらつら。つら。つら。軍忠を擢つらつら。赤松田心。佐用庄。一箇所を被  
 行。播廣國の守護職を被召返つら。又見島備後守範。長月三郎高德。つら



一箇國の所領を可賜は是れ備前新田庄を賜りたる。されば武の乱は山心俄に替りて朝敵と成りし此恨を聞かぬ。叔父二條師基公は安藝周防長門を賜り千種中将忠頭朝臣に備前備中尾張をたすあり。峯僧正日向國忠山僧正越前國を賜りければ二人も沙門の國を司る事古より其例も思召被寄るに折々の勅定こそありまわらざるを詳し被申ぬ。山觀上人を僧正は丹後國を賜らんとあり。是亦僧正の事は法體の身よりて其所謂あり。領國の事よ於て御免あり。奉り申されたる。其外智教教山玄慧を始ぬ。官僧十余人准后の御口を以て大庄を賜り。皆辭退し申されぬ。唯其中一、文觀僧正一人出雲國を給り。其外拜領しを衆にわたり申されたる。其外五十余國の守護國司國の關所大庄に悉く公家被官の人を拜領し。陶朱富貴を誇り。鄭白の衣食

飽り中も千種頭中将忠頭朝臣に故六條内府右房公の孫にて御坐せし。文字の道とて家業も嗜まり。身の弱冠頃より我道もあつぬ。豈に大追物を好む博奕淫乱を事とせし。同父有忠卿父子の義と離れ不孝の由とて被直り。然るに此朝臣一時の栄花を可開過去の因縁やあり。主上隱岐國へ御遷幸の供奉より。六波羅討手の大将にて京より上り。左にその忠功もあざり。大國三ヶ國關所數十箇所拜領申されし。其後目も驚き。自ら重恩を興へ。彼申し。家令毎日巡り酒の振舞をせし。堂上袖を連ぬ。諸大夫侍三百人。余り。其酒内珍饈の費一度一萬錢も尚足。又數十間の廐を作り。内餘馬を五六十匹被ま。宴罷て和する時。數百騎を相隨。内野北山の辺。打出て犬を走らせ。鳥を追て小鷹狩。日を暮され。其衣裳豹虎の皮を行騰。裁金縷纈を直垂縫。賤服貴服謂之。



上僭上無礼者是國凶賊也。孔安國曰誠と不恥とをくけき是とせめ  
 て俗射うれば言いたる代彼文觀僧止の振舞うそ不思議也。且名利の  
 境取を離れ既三密瑜伽の道場に入らる甲斐もあく。ひさしく利欲を  
 小多て更觀念定坐の勤を忘とるは似たり。何の爲かをともなく財宝  
 を倉に積て貧窮の者不救傍ら武具を集めて士率を逞め。媚とや  
 交を結ぶ輩うの忠をさる賞を申せられり。間文觀僧止の牛の者と  
 号し黨と立臂を張て維中を横行する者五六百人に及ぶ。去道遠うめ  
 赤肉の時も輿の前後に數百騎の兵打圍で路次を奔まらる。法衣忽ち  
 馬蹄の塵に汚れ律儀空しく入口の誡に落漢土廬山の惠遠法師へ  
 風塵の境を辞し寂莫の室に坐し給ひたり。假も此山を不出と誓  
 て十八賢聖の蓮社を結び長日六時礼讃を勤め申さまめ。吾朝笠道の  
 解脱上人の御裳濯川の月と心を清く道心を祈り神路山の松風り外道

群魔の現報を見て名利の眼を覺し。笠道山一の岩屋をトて落葉を衣と  
 葉を拾めて口食し。長く厭離穢土の心を発し。鎮あへん欣求浄土の勤を  
 専らし。智徳開け今佛法弘通の紹隆を残し申され。心ある人今も  
 古へも韜光隱跡暮山の雲を伴ひて道を行ひてそ生涯を尽と事ある。此僧  
 正如此名利の絆を羈を申され。直事にあはば。何様天魔其心に依陀  
 て角拳動せらる。あや以彼思此うそかり。文觀僧止の行儀あり哉。皆人  
 愚蒙の眼を迷り。果して牙程なく建武の乱出来し。法流相統の  
 門弟一人もなく。遂は孤獨衰窮の身となり。吉野の辺り漂泊して終り申  
 さま。

因に云此僧正君の御寄依不淺より。心僭上し。奢の余り佛説ふ  
 あらざる偽經を作りて天下に流布し。後年高野山に宥快法印  
 とのり。みどり。智識あり。光明帝康永二年奏聞を経て諸國り



在處の文觀が虚説の偽經を取集めて。天野ふ於て悉く焼亡せら。其時、文觀が書れり表紙を僅し残りたるや。今高野山に用ひり所の雪堂の表向と称せり。此文觀が作あり。文觀小隠し妻あり。其名を殊音尼と号す。此文觀の二字ハ文殊觀音の首字を取し殊音の二字ハ文殊觀音の末の字を取らる。又傳云義貞の鎌倉を亡せり。高氏が六波羅を亡せり。其功いづ。譬ハ鎌倉の樹の根より幹あり。六波羅の枝之兼あり。枝葉を截ぎても根を断ずんば枝葉再び秀る。又根を断ともは枝葉を刈ずるといふも。自然と枯つぐ。是を以て義貞の功高氏が上よりある事を知べ。况や高氏六波羅を責るよ。山心忠願良忠の羽翼あり。義貞ハ僅し一族を率し鎌倉を責其勝劣を論ずり。雲泥の違ひあり。然るに高氏を第一の功と賞し。位三位叙し大國三箇國を賜ひ

義貞を第二の功として上野播磨の二國を賜ふ。殊し兩國遠く境を隔て。万事の都合と失ふ其非道依怙の沙汰なり。事全く准后の御心惑いさせり。君の不明といふべき。此時万里小路宣房御席を出て申せり。ひたすら今度褒賞の事臣はさく案トひ。天下を覆を忠義の根本と申さる。楠正成なり。開國の大功臣然りと申さる。新田義貞杉骨碑身の戦功を申さる。赤松山心。君遷幸の輔弼を申さる。名和長年。天下北條を怨むといふも。彼が武威を恐れて背く者なり。然るに正成一番の旗を奉て籠城し。百万の大軍を引り。不洛却計を以て寄手と惱す。故に諸國武士初て北條の軍を挫し。謾り追とふ。放れ背きて義兵を起せり。然れば諸人の忠功ハ正成一人の忠功。兼る所。就中百万の寄手正成。喰通らる。京鎌倉を救ふ。能くし。ずして。つづく。小月日を送れり。君正成これ引り。喰苗る。い。あ



どん。百万の軍勢京鎌倉と充満を。あつる時の美貞高氏山心が  
 輩豈容易京鎌倉と亡む事を得らんや。然れバ開國復古の根本  
 正成を第一と。美貞を第二と。次山心長幸をおのぐ。長幸早  
 く君を取立守護し奉る。あつるどん。君敵の手を逃れ。小事不  
 能して。天下の快復もつづる事あらず。又山心播た。起て六波  
 羅と中國の通路を塞ぎ。六波羅の加勢を通さ。却て屢六波羅を  
 攻撃し。あつるどん。長幸容易君を取奉る事あらず。然れバ其功一雙  
 して。并び馳べ。高氏をおのぐ。數代親席に列す。高恩をうけ  
 たり。北条を背て官軍に属す。六波羅既運の頃。あつる時。小臨を  
 唯一戦の功を得る者。然れ。山心長幸が次。あつる。宣ひ。れ。飽。高氏  
 准後の御長負強うり。けれ。善巧便倭を以て。高氏一戦。六波羅を  
 亡し。これを。千。破の寄。も。驚。退。君も都。還。幸

群臣も安堵し。々々。然れ。高氏第一の忠。功。山心數度  
 京都へ押。上。つ。高氏不。參。已。前。不。得。勝利。高氏参り  
 て。六波羅も。亡。び。宣。ひ。君も。実。と。や。思。召。高氏を  
 第一の忠功と。被。仰。出。々々。此。事。高氏。の。舍。弟。忠。義。が。奸。謀。を。聞。え  
 々。其。故。大。塔。宮。高氏。を。誅。せ。ん。と。思。ひ。う。ひ。う。も。勅。許。あ。る。を  
 以て。黙。止。り。高氏。兄弟。此。由。を。聞。て。此。宮。不。斯。あ。く。思。れ。侍。り。て  
 備。家。の。滅。亡。此。時。あり。と。謀。て。則。ち。縁。を。求。り。て。准。后。を。ひ。く。す。の  
 奉。憑。御。傍。の。局。中。居。の。者。ま。だ。帝。種。の。引。出。物。を。ま。あ。せ。直。美  
 ま。う。三。万。貫。の。所。領。を。己。が。家。人。に。扶。助。せ。ん。是。を。別。當。職。事。推。勢。の  
 公。卿。へ。品。を。替。て。進。納。し。り。々々。御。所。中。の。内。外。上。下。の。輩。高氏。は  
 過。々々。人。の。あ。は。じ。と。申。あ。つ。り。准。后。や。々々。賄。賂。し。々々。高氏。は  
 事。と。大。切。思。召。し。り。々々。月。寄。花。し。り。々々。巧。言。令。色。を。以。て。能。様。ふ



申かゝりつひらまはる君もかゝる思召たりとや

又云名和長年の勅約少しと云らむ。因幡伯耆を給ひたれ。自

今弥々忠勤を励むと云ひしとや。殿法印良忠も若狭但馬

を給ひし事已し足ぬと云。下民を憐み政を盡直に行ひたり。前地

武重はさしも無二の御味方なり。僅肥後一国の本領を安堵し始

より二心表裏及乱せし。小貳大友の坂前肥前豊前の三国豊後

の二國を當行りてあり。道ある御執成是も准后の御口入故と

ぞ聞えり。是に付ても赤松同心功有て罪ある。何故かく情なく

被仰出ひし。其来由を尋ぬ。此入道父子始め大塔宮の令旨も

應じて美兵を奉り。元より勲功の上播備兩國を賜りし由

被仰渡。又重て舟上りも兩國相違あり。まじき赴き論旨有

因之今宮勅約の如く兩國を赤松に可賜止御執成ありと云。准

后と宮御中不快あり。故御只在て妨支りひらむ。因て忽ち播廣の

守護職を被召上佐用庄なり。被下たり。山心又子諸國の大

小名に對し面目を失ふて骨髄に徹し。と云。見島高德もまじ

僅に新田の庄なり。被下たり。依て不平を懷き。まじき父範

長深く申宥めり。依て其終り打過たり。且又准后の御口入と

播廣國を高氏に賜らんとあり。直義速く准后へ申入る。播

廣の事高氏が恩賞可為。實に天下無双の國なり。侍も拜領仕

度。ひらむ。退て愚案をめぐり。此國の内宮の御口入。赤松に

可被下所御達變の上。高氏に被下置ひり。宮の御憤りあり

重。御惡最深。然れ。自余の輩に被下。高氏に

東國の並し。得て常陸國を拜領仕度。奉存の播廣の美の義貞に

賜り候り。宮の御憤りも少く奉存。言葉を銚り。傍弁と云



ありて申入るるを高氏一つ々し諸卿達新田足利日頃不快の  
 中ありよ。かく大國を辞退して義貞譲るるを内奏しては。實  
 一私あま天下の忠良と評定あつて。高氏一帝陸を賜り義貞  
 備後國一引替て播磨國を賜ひて。是直義が奸計して若高  
 氏播磨を領する。一乱を發する時赤松味方とて却て敵  
 と成て中國の通路を塞ぐ。由々大事之所。詮新田一領知  
 させむくあつて。赤松が恨新田一かかれ。然れ高氏乱を發す時  
 赤松一播磨を伐取て可領旨申はる。山心喜んで味方  
 屬して。播磨へ亂入る。然る時播磨一あり新田の手の者共  
 赤松と合戦して他國発向の用い。此時一至りて義貞  
 先一國を失ふ道理と。深く謀てか。執成申る。直義心  
 中最恐る。又准后の御口入。仍て在京賂料して高氏

義作國一々大庄三ヶ所賜る。直義幸ひの事あり。高氏を勸  
 め此度赤松殿の御事何とも御痛間。かく右の三ヶ所を山心  
 一扶助して其心と結ぶ。め。是より山心深く高氏小親と。か  
 ら謀計と。誰もあはしと思ひ。楠正成の。此事を  
 義貞の館に至る。去子細の候得む播磨の事御辞退可然と  
 是利兄弟の心中細と。か。義貞實ると。閉ひて大館  
 船田を始末宗徒の。を聚めて評定せ。宗徒の。被申  
 ら。正成の申。義と當れり。去去事余り。遠く存。備後の小  
 國を御取あ。播磨を御拜領あ。方一六ヶ。事と  
 候。早速赤松一賜らん。何の子細。あり。由良新左  
 衛門此折節楠を恨む事あり。進。出て正成の。勇士謀  
 深。候得。自分の領國。津。並。國。若望。有



てかく申さるるもあつたがうらむ。様しく申すに、義貞心は、  
 遂に播磨を拜領せしむる。然れども、義貞萬づ不子を懐きて、  
 こ申さるるも、里見大江田大館船田等一族宗徒の輩も、打集つて、  
 かくのこゝろも、此度恩賞何事ぞや。足利大勢を率て、僅に籠鳥の  
 如く、六波羅を討して、當家の小勢を以て、數幸威を逞く成るる  
 鎌倉を亡し、つらと。恩賞は日の論、あつたがうらむ。剩へ高氏を、  
 功と稱し、當家は越て、大國三ヶ國あて行つて、糸朝庭の私如何と、  
 貞は向て、鬱憤を伸々、義貞人々、向ひささば、と我、不義  
 人の不義を申す及、後代は沙汰、と申す。申され、  
 を君剛石て、義貞が申所、其智あり、とて、子息、義頭を、越後守と  
 越後國を賜ひ、是を、是も、義貞及び一族も、少く、憤りを、息給  
 ひて、つら。又、正成は、摂津河内西國を賜ひ、事。宗徒の、一、良、後、の、輩

打集ひて、評定申す、つら、始め、義兵を、奉り、刻に、河内和泉紀伊、  
 津の四國を、當被行其、上將軍の、称号を、賜ふ、と、論命の、所、今、勅、約  
 相達し、高氏が、僅の、忠功は、莫大の、恩賞を、賜ふ、と、何事ぞや、  
 一の、忠義を、立り、我らが、粉骨、碎身の、つら、事と、成て、心、  
 高氏は、功を、奪はれ、褒賞、彼、方、を、以て、毎念、ある、次第、  
 申す、正成、和人に、つら、道と、あつて、左様、被申、ひ、君の、思、  
 ら、非義、あり。高氏が、此度の、忠、宣ふ、所、の、如く、され、ども、大國を、領  
 たり、器、當り、つら、人、ある、が、某も、左社、見て、侍れ、某君、  
 ざり、つら、己前の、事、誣し、思ひ、出、つら、本領、も、つら、  
 一、つら、今、の、恩地、殿の、分、限、つら、も、被、  
 皆、これ、君の、御思、つら、河内一國を、被下、つら、  
 せや、と、申、つら、正氏が、曰、某、  
 不存、候、申、度、事、の、多、



侍うと謂せしめて正成以て外に気色を損じ家身を生きて惣  
 領の申事を否と被申条不心得か左様の心侍らば向後對面申  
 くひと詞あかしく被申らば正成を始り一座の人とさへ俯向て赤面す  
 良ありて正成申様やれ正成君は對し奉り一命を以ては參せを  
 思ふ身の如何ある御しうひあまざる何の不具たり存んや攝州  
 半國の貴辺に賜てぬとて與へたる後君御石實に忘れり正成  
 が思ふ所最恥しうれとて正成は和泉國を賜りたる然れども  
 泉州に攝津半國より分内按さる故に和正遠に譲りて正成を  
 和泉守とす正成は攝津半國を興へて攝津守とす其身は河内判  
 官に成申されりかゝる正成が心に引替赤松後朝敵と成りて  
 歎むぐい室で君君とせざれども臣たるの道を尽さざるや  
 正成の心より君の爲に重き命ども奉り況や恩賞少しとて

上を怨む不忠の汚名を末代に残さざるや正成は實に忠良の勇  
 士山心これ録を貪り匹夫の勇者と申べし

廣有内裡射化鳥 修造神泉苑禳妖災

元弘三年七月改元有て建武に被移これに後漢の光武帝王莽の乱を  
 治め再び漢世を続け佳例也とて此年号を被換りたりや然れども  
 後におひ合はれ光武は自ら建武で天下を治め此君は高氏に建武を  
 遂に天下を被奪りひたりとていふやこれに今年天下に疫癘流  
 行し死する者甚多し是の如きは仲秋の初頃より紫宸殿の上は  
 怪鳥来つてのつとむくこと鳴る其声響雲驚耳聞人恐まことつと者  
 あし即ち諸卿相議して申さるる様昔漢土堯の代に十の日に並出たり  
 と。罪と云々者承て正統の二ツの日を残り九ツの日を射落せり我朝の古  
 へ堀川院の御在位変化有て奉君悩しと前陸奥守義家承て殿上の下



口候ト。三度弦音しく鎮まき。近衛院の御在位化鳥あり。雲中を翔て  
 鳴其声鶴に似たり。源三位頼政勅を蒙て射落し。例あれ。源氏の中  
 一維有りて射ゆ。被尋られ。射も。生涯の恥辱と思ひ  
 たり。我承んと申者。御尋有る。二條園白左大臣殿の君仕られ。隠岐良  
 左衛門廣有と申者。其器。堪る者。申者あり。左の懸  
 廣有。被君。廣有鈴の間の辺り。仕候。ける。勅定を承つて思ひ  
 たり。若蚊の睫。巢。の如く。小。虚空の外。翔る者あり  
 矢も不及。此鳥声大。必。其形も大。日。見ゆり  
 程の。た。雲。か。其声。矢懸。不何  
 あり。射。物。ひ。一。不申。長。領。掌。  
 則ち下人。持。弓。矢。取。孫。廂。の。陰。立。隠。れ。此。鳥。の。あり

八月十七夜の月殊。晴渡。虚空。晴。明。大内山の  
 上。黒雲。群。鳥。鳴。存。あり。鳴。吟。炎。吐。覺。て。声  
 の。内。より。電。御。簾。の中。散。微。も。廣。有。此。鳥。の。在。所。能。見。課。せ。弓  
 押。張。弦。く。ひ。ま。流。鏑。矢。を。差。番。ひ。て。主。上。の。南。殿。出。御。成。り  
 殿。覽。あり。白。殿。下。左。右。の。大。將。大。中。納。言。八。座。七。辨。八。省。輔。諸。家。の。侍。堂。上  
 堂。下。一。袖。と。連。文。武。百。官。列。つ。て。これ。を。見。つ。あ。ん。ど。ん。と。か。ぐ。と。吞。で。打  
 汗。奉。る。処。廣。有。已。主。向。て。欲。引。弓。々。々。聊。思。案。も。様。有。氣。あ。り  
 ず。げ。流。鏑。雁。候。も。抜。て。打。捨。二。人。張。十二。束。二。ツ。伏。き。り。と。引。あ。り  
 て。無。尤。右。不。放。之。鳥。の。啼。音。を。待。り。々。々。此。鳥。例。より。飛。下。り。紫。震。殿。の上  
 二十。又。計。が。程。鳴。り。々。々。処。を。聞。清。しく。弦。音。高。く。兵。ど。放。つ。前。紫。震。殿。の  
 上。と。鳴。響。雲。の。間。手。答。へ。何。と。大。磐。石。の。落。懸。る。が。如。く。聞。こ。え  
 仁。壽。殿。の。軒。の上。より。二。重。竹。臺。の前。ぞ。落。り。々。々。堂。上。堂。下。一。同。り





廣有  
 内裏小  
 怪鳥  
 射る  
 園

太平卷二廿八十二

三八



嗚呼射るる感ずる声。半時をりりめめて且鳴も体どりり。衛士の習い松明を高く捕せて是を御覽せり。人頭蛇身あぐり。蒲の前曲で齒鋸の如く生連ふ両の足長き非在て利刃のじ。羽先を延てこれを見れだ。長さ一丈六尺あり。扱も廣有射る時。彼矢の根を抜捨つる何故ぞ。御尋ねあり。廣有畏て此鳥御殿の上。當て鳴候いつの間放りり。矢の落候り。若宮殿の上。立ゆり。禁忌く奉存の間。根を抜捨つる。申けれ。至上厭感不斜其夜聽て廣有と五位に成され。日因幡国。大庄に所賜て。弓矢取身の面目。後代まの名譽あり。扱も兵革の後如斯。妖氣猶禍を示。此殃を銷る。真言秘密の如驗。あはれ。俄に神泉苑を修造せり。抑神泉苑と申。大内裡始て成し時。周の文王靈固。准へ方八町。被築り。園圃也。其後弘法大師善女龍王を勧請せり。今真言の道場と云。此池の

龍王と勸請の来田を尋る。桓武帝の御在位。朱雀門の左方にあり。鳴臚館を改て寺と。左と東寺と名づけ。空海に賜り。右と西寺と。守敏に賜り。西寺に金剛界の五百餘尊を安んじ。玉體の長久を祈り。東寺に胎藏界の七百餘尊を置て。金輪の宝祿を守り。是より左右東西に別て互に法力を競ぶの心あり。或時守敏僧都参内。帝の御手水の氷を火印と結いて湯と。又爐火の熱を水印と結ひて。忽ち冷灰とせら。帝此不思議と見て。湯仰不淺。一日空海を被召て。守敏の奇特を御物語あり。りり。空海御答へ申さる。様古語。馬鳴。褰帷。鬼神去。閉口。搗檀。礼塔。支提。破頭。戸申事。のく守敏も空海が右ん。斯くて。持の不思議候つ。と欺て申されり。帝さる。西人の如驗。威徳の勝劣を御覽せられんと。思召て。空海を一室の中。隠し。直て守敏を被召られ。勅。應よ守敏。御前は仕候せり。時。帝ニツの建蓋。水と湯と盛て。加持を乞ひ。ひけれ。



守敏子細候りて。水と盛るる蓋に向ひて。火印と結び被申くれども。水敢て不成湯亦湯と盛るる蓋に向つて。水印と結くれども。湯敢て成ば。尚建蓋の中へ拂返る。守敏前後の不覚。失色損言申されり。處へ空海傍ある障子の中より立出て。何れ守敏空海告あり。星光消朝日螢火。隱曉月とぞ笑れり。守敏大これと恥て。鬱陶と心中へ挿。噴惠を氣上へ隠して退出せられり。又其夏三月の間雨あつして。百姓耕作を勤むるにあつた。天下の愁一人の上へ歸りて。夏に於て守敏速に請雨の事と奉願被申くれ。去むとて。勅許あつたり。守敏仰と奉つて。深信と雨と乞申され。雨降事僅に半時計にて少くも。田圃枯渴の扶けとあつたり。されども。君弥天災の民に害ある事を愁ひり。此度空海と請て。雨の祈りて。被仰付り。空海勅を承て。祈り被申くれども。更に雨降ざり。先七日間入定して。明う。三千界の中を御覧たり。守敏僧都。空海の雨と正たり。

事と妬。又君と恨。奉る憤。骨髄入て深うり。内海外海の諸諸神。已が呪力を以て。悉く水瓶の中へ。驅重置り。されども。更に可降雨。竜王たり。但し北天竺大雪山の北へ。無熱池と云池あり。此所の善女龍王の守敏の呪力。及びて封じられ。空海定より出て。此由を奏し。神泉苑の壇をのり。善女竜王を請り。申されり。竜王金色八寸の小籠と現。池へ来臨し。主上殊に敬嘆せさせり。和氣真綱を勅使として。大幣と捧げ。種々供物を以て。空海へ竜王を祭らせり。其効驗在て。退雲油然として。国土へ普く雨を降せり。三日更にとや。災旱の憂長く消ぬ。主上真言の道を。帰依渴仰し。事自是弥盛也。守敏益々憤り。深く。去へ空海と調伏せん。と被思ふ。西寺へ引籠り。密に三角の壇を。構本尊を北向して。軍荼利夜叉の法を。被行り。空海此由を。凡て。東寺へ。炉檀を。構へ。大威徳明王の法を。修し。申されり。兩僧何をも。徳行薰修の尊。



宿るしう。二尊の射うふ箭空中に合て地に落る幸鳴止際もかうり  
 爰に空海守敏を油断させんと思召て俄に入威の由を披露せられれば。經  
 素流悲歎泪貴賤吞哀慟声守敏因之我法威成就し悦び則ち壇を破  
 破り。此時守敏俄に目くら鼻血影しく流れ忽ち心身悩亂し倒れ伏て  
 無墓園寂せられり。兄咀諸毒集還着於本人と説く。金言誠し驗ありて  
 不思議ありと皆人舌を卷て思まらる。或夜空海の空中に守敏然と形  
 をあらし。我假に此世に來り汝と法力を競べて却て汝が法徳と世に顯  
 せり。我も是降三世明王に守敏に我化身とあるべしと告終て。かき流  
 如く小見えざりたり。空海の竜王を襲て神泉苑に留め奉りて。竜華下生三會の  
 曉に此國を守り我法を治めりて御契約在て則社檀と造宮あり空海  
 亦諸門弟に教誡して。若此竜王他界に移らば池浅く水少くて國あれ  
 世々うづ。其時我諸門弟志を合一祈請を加へ竜王を永く請ド

奉り可助國とて宣ひたる。今水浅く池あせり。移るる竜王他界に移りた  
 する然も。請雨經の法を被行毎に掲焉の灵驗猶不绝を見る時を。  
 のまご國に捨りて。や実一瓜雨時に叶て。感應奇特の灵地之代の帝是を  
 崇めし時世の賢臣敬之申されり。若早魅起る時。先池を淨む。然るに後鳥  
 羽法皇あり居させり。後此所廢を荆棘路を罔蛇蝎義と宿と心あり人  
 恐れ歎るごとしの事なり。承久の乱後武州禪門峰垣を高くし。門を堅くし  
 雜穢を止め申さまられども。其後涼燠敷改つて。傳く門墻全く。木淨  
 汚穢の輩の出入も制止する事あり。牛馬水草を求むる往來憚るをば。  
 定て知ぬ龍神快びり。故に今修理を加へ崇め重く。あり  
 良忠謀殺足利兄弟。准后便佞。護良親王  
 兵部卿護良親王。天下の乱に向ふ程。其身の難を遁ん為し。御法躰を被替  
 とし。四海已に靜謐の上。如え三千貫長の位。復り。佛法王法の紹隆を被



給りし。佛意も契ひ眷顧するも違つせり。またかじを征夷將軍の位  
 御望のしる。聖慮穩りあはせり。御望すまはせ。遂に征夷將軍乃  
 宣言を被下り。斯れは四海の侍頼とて慎身位を重くせり。御  
 事あり。世の譏りを忘て嬉樂を事と。御心の休後を極めり。い  
 天下の人皆再び世の危あはる事と思ふ。大乱の後弓夫を裏て干戈袋  
 とも申し候。何の用もあさる。強弓を射る者大太刀と仕ふ者とど  
 一申せ。忠あるは思賞を被下。左右前後に仕承を乘へ此者ども毎夜京  
 白河を横行し。辻切とあはる程。路次に行逢。児法師女童部此彼に切倒  
 され。横死し逢者休時。是唯御趣意在て是利治ア卿を深く悪ませ  
 り。今上今度功過する思賞。預りたるより。除御憤も強く如何に  
 て。彼を討んと思召て斯溢れ。の共を石抱へ武を習せり。ひるより。御行跡  
 かる。御奉動も及びる。此宮御生得。才智賢く在り。上殿法印良忠

先連て千の者も高氏に被刑。る憾を以て。より。高氏が行跡を宮に訴へ申  
 り。宮は志賞し。御座る時より。高氏を誅せんと思召。され。早く勢  
 の微ある時。誅せむ。後の禍を成ゆ。と奏。良忠。あはる。准后あ  
 まで高氏を良員。より。依て更。勅許あり。或日良忠。宮に参り。  
 高氏兄弟が隠謀。進。日。侍り。あ。代。已。乱れ。見え。いと申。宮  
 何事の侍ら。事新。と宣。良忠。曰。今諸国。忠を專。て褒賞を  
 受。者。千。是。等。皆。君。を。恨。申。所。存。あ。ら。ん。や。其。上。今。大。内。裡。の  
 修造。諸国恩賞の地。光。分。一。の。得。役。を。被。懸。事。邪。より。廿。分。一。五。分。一。の。役。に。當。る。  
 これ亦人の怨所。夫等と高氏親。も。か。つ。け。ひ。廻。り。事。已。明。白。之。此。後。に  
 侍ら。代。は。ま。武。家。の。有。と。成。侍。ら。ん。宮。の。事。も。此。事。勅。許。あ。ら。ん。力。及  
 ば。予。か。つ。て。あ。ら。ん。程。に。新。田。楠。名。和。結。城。の。輩。も。高。氏。に。随。ふ。事。あ。ら  
 ず。然。れ。バ。国。々。の。集。り。勢。幾。万。人。同。意。し。り。何。程。の。事。も。出。来。ん。誅。罰



種を田らひてと。何共あがら宣ひける。然れども良忠折々申進奉  
 つたれが。宮も左あつた勅許あつとも朝家のつち。國の為されが。内隠  
 密の儀を以て諸國へ令旨を被成兵を被召らる。高氏兄弟此由を閉出  
 て身の上の大事。此は極つぬ。被思らる折節。伊豫國大森の類彦七を使  
 じて。密に宮令旨の趣と高氏へ注進も。高氏兄弟大いあつた。免やせん  
 角やと評定せられり。所へ又高氏日頃入魂せられり。所の大小名諸州中國  
 関東より追々使を以て宮の令旨を送らる。此上を高氏内継母准京  
 奉屬で申入らる。兵卿親王の隱謀事已に近々朝敵追討へ被仰出  
 此當時何れも朝敵可有之哉正々帝位を奪ひ奉らん為に諸國の兵を  
 被召ひ其證據分明いふと。國之被成下候如の令旨數通と差出し。猶  
 又申入られり。内高氏を討んとの御企とも申侍る。然れども朝恩身ふ  
 余て覺えの上全く君に對し奉り何の不足り候らん。察ひ高氏朝家

これより帝位奪ひ安く思召故に左様。被仰侍り。既に元弘  
 兵士の時も諸國へ被下し令旨いふ。論旨の文章に被遊ひを以て。御隱  
 謀の御志紛々い此旨奏聞を被經公義を被定ひ。と言兼に銚りて  
 被伸らる。准后時と不替此事と奏達し。數通の令旨を上覽し。備奉  
 られり。君大に逆鱗有て此宮可處流刑と。中殿の御會し事を秀  
 兵部卿親王を被召らる宮から事とい更し思召も寄せり。前駈  
 二人侍十二人手輕く召具して。御参内有らる。結城判官名和伯耆守二  
 人兼てより勅定を承て用意し。鈴の間の辺り待受て奉捕之  
 宮に打驚らせり。ひてこの何事ぞ。被仰問もな。則ち馬場殿に奉押置  
 宮に蚊牛結らる。一回の中。参り通ふ者一人もあ。泪の床に起伏せり。小  
 も。こそ如何なり我身ぞや。元弘の始り武家の為し身を隠し。木下岩の  
 被問り露々袖をり。歸路の今二生の樂と末二日終り。讒者の為



彼罪斯刑戮の中一苦しむんを被知召さる前世の報すをも思召残  
 う方もあし虚名不久と申幸もいふれをさうりも君同召直とせ  
 り事もやし思召るる処に公儀已く遠流に定り足利直義が平に渡  
 され鎌倉へ送らるるごとく聞えられ御悲しきま堪えせらるる内御心  
 よせの女房として委細の御書を遊し傳奏し付て急ぎ奏聞を經  
 由と被仰遣らるる其文一云

夫以勅勸之身欲奏無罪之由淚落心暗愁結言短唯以一合  
 穿萬加詞被恤悲者臣愚生前之望云足而已夫承久以来武  
 家把權朝廷棄政年尚矣臣苟不忍看之一解慈悲忍辱之法  
 衣忽被怨敵降伏之堅甲内恐破戒之罪外受無慙之譏雖然  
 為君依忘身為敵不顧死當斯時忠臣孝子雖多朝或不勵忘  
 或徒待運臣獨無尺鐵之資搖義兵隱嶮隘之中窺敵軍肆逆

徒專以我為根元之間甲海下濺萬戸以贖誠是命雖在天奈  
 何身無措處昼終日卧深山幽谷石巖敷苔夜通宵出荒村遠  
 里跣足踏霜撫龍鬚消殘殘虎尾冷宵幾千萬矣遂運策於帷  
 幄之中亡敵於鉄鉞之下龍駕還都尊曆永則天恐非微臣之  
 忠功其為誰乎而今戰功未立罪責忽來風聞其科條一事非  
 吾所犯虚説所起惟悲不被尋究仰而將訴天日月不照不孝  
 者俯而將哭地山川無載無礼臣父子義絶乾坤共棄何愁如  
 之乎自今以後勲業為誰策行藏於世輕綸宣儻彼優流刑亦  
 削竹園之名速為東門之客君不見乎申生死而晉國亂扶菴  
 刑而秦世傾浸潤之譖層受之愆幸起于小禍皆逮大乾臨何  
 延古不鑒今不堪懇歎之至伏仰奏達誠惶誠恐謹言

三月五日

護良



前左大臣殿

とぞ被遊々。此御文若殿剛に達し、今も実否を被乳て。宥免の御沙汰もあり、ごまの傳奏我身まゝ何如の憤つと受如何の誤口あ懸らん。と恐まて、終よ不奏剛々も上天隔听不啓中心之訴し悲し良忠と始め、此年月宮に付副奉り、宗徒御内の候人平賀岡本等三十余人全く宮の御私曲益之由を訴へ、准后の御口入強きが故り君用召不被入結句誤口を信じりて、三十余人の輩を殊に可處とて嚴しく獄舎に被籠り、嗚呼悲いふ君徳あまが賢人朝仕て小人四夷に退き君徳を則に誤傳朝まびつて、賢者野に隠る。古より然る。今内は准后あり外は奸臣在て親しきを遠ざけ、賢良と覆ふ宮の御罪其実否も尋と其虚実も不被正事全く磨智を被暗くあり。彼令罪條究るも南都熊野吉野の間に難苦心勞の軍忠多と御事あれが加程に嚴しき禁獄に及ぶまじきあり

御親子の御中し申。才覚人、勝れさせり、謂殊に黒牟の軍功も人傍り、以て御思慮可有事と心あるもの歎息せり、宮の候人三十余人の其中、赤松則祐、先宮の仰と養つて本國に帰りぬ、小寺の相摸坊に召捕る、この日如何と此難を遁れ、後赤ねし身を寄て朝敵にたりたり

高貞内裏鞍龍馬

公賢例八駿賀天馬

鳳閣の西二條高倉、馬場殿とて、俄に離宮と被置り、天子常し車成て歌舞蹴鞠の隙、馬馬の連者を被召、龍馬を番し、坐懸を射させ、御遊の真を被添る。其頃佐々木鹽治判官高貞が許より、竜馬ありとて月毛の馬の三寸、計より曳進む。其相形実も尋常の馬に異なり。骨峯り筋太く、脂肉短頸、雞の如く、須弥の髮膝と過背、龍の如く、四十二の辻毛を巻く背筋、連つて西の耳の竹と刺げ直、大を指、双眼、鈴を懸て地に向ふ如く、今朝の外、越し出雲の畠田とて西の射の始り、京着も、其道已七十六里、鞍上



閑くして後、坐せり。如く然れども、旋風面を撰く不堪とて奏し。則ち  
 左馬寮に被預て朝に禁池に水飼、夕べに花庭に林飼。其頃天下一の馬乗  
 と聞えり。本間孫四郎と被召て被乗り。半漢、深甚と不尋常、四蹄を  
 縮む。又六盤の上より鞭を當れ、十丈の堀をも越つ。誠、天馬はあつた。斯に  
 駿足、難看とて、獻慮更に類ひたり。或時主上馬場殿に幸成て、又此  
 馬を獻覽あり。諸御皆左右に候む。時主上洞院相國公賢く向ふ  
 被仰り。古く屈産の乘項羽が、雖一日千里を翔る。我朝は天馬の  
 来ることを未だ聞かざり。然るに朕が代に當て、此馬不求し出来り。吉凶如何と御尋  
 あら。相國御答被申。是聖明の徳に不依、天豈此嘉瑞を降し  
 候や。虞舜の代に鳳凰來り。孔子の時に麒麟出たり。就中天馬の聖  
 代に來る事、第一の嘉祥也。其故は昔周穆王の時、驥騏驎騶騶駟駒とて八  
 足の天馬來り。穆王是に乗て、四荒八極不至との所あり。或時西天十萬

里の山川と一時、越て中天竺の舍衛國に至り。時、釈尊靈鷲山より、  
 法華を説く。穆王馬より下て會座に、隙んで則佛を礼し、奉て退ひて、一  
 座より。如來向て宣く、汝は何國の人。穆王答て曰、吾は是震且國の王なり。  
 佛重て宣く、善哉。今來此會場、我有治國法、汝欲受持否。穆王曰、願信受  
 奉行して、理民安國の功德を施さむ。爾時佛漢語を以て、四要品の中の八句の偈を  
 穆王に授けり。今法華の中の經律の法門有との、深秘の文是なり。穆王震  
 且、歸て後、深く心底に秘して、世に不被傳。此時穆王寵愛の童子あり。名を  
 慈童と云ふ。恒に王の傍に侍り。或時彼慈童君の空位をさぐるが、誤て御  
 枕の上をぞ執り。群臣議して曰、其例を考ふ。罪科淺く、あつた。雖  
 然、事深より出さば、死罪一等と宥て、遠流し可被處とて奏し。穆王も  
 群議不得止事。慈童を南陽の郡縣へぞ被流る。彼地の帝城を去と、三百  
 里、山深く、鳥も不鳴、雲暝くして、虎も充滿を流し、假し、此山へ入人の



生て歸るし云しなり。穆王慈童を哀れ心切りて被叙尊より受  
 持しうひる。八句の内を分ち普門品一説入らまざる。二句の偈を潜し慈童に授け  
 うひ。毎朝十方を一礼し此文を可唱とぞ教へうひる。慈童則ち郡縣に被流深山  
 幽谷に被棄て常し君の恩命を思ひ毎朝一返此文を唱へうひる。若忘れもせん  
 とて。側ある菊の下葉毎し此文を書付たる其よりけ菊の葉しあひる下露皆天の  
 冥藥とする。慈童渴し臨て是をわひる。其味天の甘露の如くや。恰も百味乃  
 珍し勝れ。加之天人花を捧げて來り鬼神を束縛て奉仕しる間敢て虎狼の  
 恐も悪獸の憂へうひる。返し換骨羽化して仙人とまほり。是のまかへ慈童が  
 二句の偈を志しうひる。菊の葉の露僅し落集て流るる谷の末を汲て飲るる民三  
 百餘家皆病即消滅し上壽の百二十中壽の百餘歳を保ち候しや。其後時代  
 推移り八百余年と過て。慈童猶少年の貌し。更し衰老の姿なり。魏の文帝  
 の時名を彭祖と替て。此文を帝に授奉る文帝是を受け菊花の盃を傳て萬

歳の壽を祝せり。今の重陽宴是なり。夫より後皇太子位と天子受させり。小時  
 必先此文を受持しうひる例し。依普門品を當途王經と申あるは。此文  
 我朝に傳りて久し。去ば世の聖主御即位の日必どこれを受持しうひる若幼  
 主の君踐祚あり。時に攝政まが是を受け御治世の始しこれと君に授奉る。此八句の  
 偈三國傳來して理世安民の治畧除災共衆の要術と成り。是偏し穆王天馬の  
 徳あり。今此龍馬の來れる事全く佛法王法の繁昌宝祚長久の奇瑞し疾  
 べし被伸しうひる。主上を始めまはせ。當座の諸卿悉く心服し。首を承  
 て賀し申さぬ人の益りなり。併此座し万里小路藤房卿の坐さるるれば主上御  
 心の中し物毎し練をを加ふる藤房も。此龍馬に於て賀を伸るの外あはら  
 むし思召し藤房の参内を今や遅しと待せり。ひはかり

藤房卿因馬奉諫言  
 藤房卿重而奉諫言

暫あつて万里小路中納言藤房卿参内あり。座定りて後至上則ち藤房卿



不向(ひら)くせりひ天馬(てんま)の遠(とほ)きまうり来(き)れりて。吉凶(きこう)の間(ま)諸臣(しよしん)の勘例(かんれい)已(い)し先(まづ)畢(ひ)ぬ藤房(とうぼう)

如何(いか)思(おも)へるぞと。勅問(ちくもん)ありくまむ。藤房(とうぼう)の謹(びん)で被申(ひまを)々々(々々)。天馬(てんま)の本朝(ほんてう)来(き)れり

事(こと)。古今(ここん)未(ま)だ其例(そのれい)を承(うけ)りゆひの善(ぜん)惡(あく)吉(きち)凶(きゆう)勘(かん)申(まを)難(がた)しとて。退(あひ)ひて愚(おろ)かきを回(まわ)

らし疾(はや)し是(こゝろ)吉(きち)幸(さい)し在(あ)るべし。其故(そのゆゑ)昔(むかし)漢(かん)の文帝(ぶんてい)の時(とき)一(ひと)日(にち)一(いち)千里(せんり)を行(ゆ)馬(ば)を献(けん)る

者(もの)あり。公卿(こうせい)大臣(だいじん)皆(みな)相見(あひま)て此(こゝろ)を賀(が)むと文帝(ぶんてい)笑(わら)ひて宣(のたま)く吾(われ)吉(きち)し行(ゆ)日(にち)三(さん)十里(じゆり)凶(きゆう)

行(ゆ)日(にち)五(ご)十里(じゆり)鶩(う)安(あん)在前(ぜん)屬車(じやくしや)在(あ)る後(のち)吾(われ)獨(ひとり)乘(ま)千里(せんり)の駿馬(せんば)將(まさ)安(あん)之(し)乎(や)とて乃(すなは)償(たが)其

道費(みちづかい)而(して)遂(ついに)被(ひ)返(かへ)之(し)り。まゝ後(のち)漢(かん)の光武帝(こうぶてい)の時(とき)千里(せんり)の馬(ば)と宝劍(ほうけん)を献(けん)むるの

あり。光武(こうぶ)是(こゝろ)を珍(めづ)しとせ。復(また)て馬(ば)を鼓車(こしや)し駕(が)し。劍(けん)を騎士(きし)に賜(たま)ふ。又(また)周(しゆ)の代(しろ)已(い)し衰(おとろ)

へんとして房星(ぼうせい)降(くだ)り八匹(はつび)の馬(ば)と化(け)を。穆王(ぼくわう)是(こゝろ)を受(う)け造父(さうふ)をして御(ご)さし。西(せい)荒(わ)八

極(きよく)の外(の外)瑤池(やうぢ)に遊(あそ)び。碧(はく)基(き)に宴(えん)し。ひひし。七(なな)朝(てう)の祭(まつり)年(とし)を遂(ついに)衰(おとろ)へ明堂(めいどう)の礼(れい)日(にち)

随(したが)ひて廃(た)れし。周室(しゆうしつ)是(こゝろ)より傾(かたむ)けり。漢(かん)の文帝(ぶんてい)光武(こうぶ)の代(しろ)是(こゝろ)を弁(わ)て弁(わ)て福祚(ふくそ)久(く)

し。榮(さか)え周穆(しゆうぼく)の時(とき)是(こゝろ)を愛(あい)し。王業(わうぎやく)始(は)めて衰(おとろ)ふ取捨(とくせつ)の間(ま)凶(きゆう)吉(きち)的(てき)然(ぜん)として耳(みみ)小

あり臣愚(しんぐ)竊(ひそ)し是(こゝろ)を案(あん)し。由(よし)來(き)る物(もの)非(ひ)妖(あ)只(ただ)蕩(たう)君(きん)心(しん)則(すなは)爲(な)害(がい)とつ。去(き)る今(こん)政道(せいだう)

正(ただ)し。其故(そのゆゑ)大乱(だいらん)の後(のち)民(たみ)の幣(へい)多(おほ)く上下(じやうげ)苦(くる)んで天下(てんか)未(ま)だ安(あん)らざる。六(む)執政(しやくしやく)吐(つ)哺(ほ)て

人の愁(うれ)を聞(き)て諫(かん)臣(しん)上(じやう)表(ひょう)て主(ぬし)の誤(あやま)りを可(よ)く正(ただ)しむる。百(ひやく)辟(へい)ハ樂(がく)し。婦(め)して世(よ)の治(ち)否(ひ)を

不(な)見(み)群臣(ぐんしん)の言(こと)阿(あ)つて國(くに)の安危(あんき)を不(な)奏(そう)依(よ)之(し)記(き)録(ろく)所(じよ)決(けつ)断(だん)所(じよ)群(ぐん)集(じふ)せし。詐(しや)人(にん)日(にち)々

減(か)して訴(そ)諫(かん)徒(た)閣(かく)て。諸(しよ)卿(せい)是(こゝろ)を視(み)て虞(よ)芮(じゆ)の詐(しや)止(と)めて。諫(かん)鼓(こ)擊(げき)とる。無(む)為(ゐ)の徳(とく)

天下(てんか)よ及(およ)び民(たみ)皆(みな)堂(だう)々(々々)の化(け)は誇(こほ)りと思(おも)ふ。悲(かな)ひ哉(や)其(その)迷(まよ)へる幸(さい)甚(じん)し。己(こゝろ)元(もと)弘(ひろ)大乱(だいらん)の始(は)

天下(てんか)の士(し)率(そつ)率(そつ)奉(ほう)て官軍(くわんぐん)に屬(ぞく)せし。更(さら)は無(む)他(た)只(ただ)一(ひと)戰(せん)の利(り)を以(も)つて勳(くん)功(こう)の賞(しょう)願(げん)

と思(おも)ふ故(ゆゑ)之(これ)を銜(くは)倉(くら)亡(な)び。世(よ)の諍(しやう)諂(てん)の後(のち)忠(ちゆう)を立(た)賞(しょう)を望(のぞ)む。軍(ぐん)幾(いく)千(せん)万(まん)といふ

數(かず)を不(な)知(ち)然(ぜん)れども公家(こうか)被(ひ)官(くわん)の外(の)未(ま)だ恩(おん)賞(しょう)を賜(たま)り。若(ごと)し者(もの)あつて。

申(まを)状(じやう)を捨(す)て訟(そう)を止(と)め。忠(ちゆう)功(こう)の不(な)立(た)を恨(うら)む。政道(せいだう)の不(な)正(ただ)を編(あ)む。皆(みな)己(こゝろ)が本(ほん)國(こく)に

歸(かへ)る者(もの)諫(かん)臣(しん)是(こゝろ)を驚(おど)りて。雍(おう)齒(し)が功(こう)を先(まづ)して。諸(しよ)率(そつ)の恨(うら)むを散(さん)む。若(ごと)し者(もの)





藤房卿  
上あまのまはら  
因馬奉  
諫言

大平卷二世第十一

三十九



かく先大内裏を造営可看とて。諸国の地頭二十分一の得分を割て被召らむ。兵革の幣の上。此功俸を悲しむ。又國々守護威を失ひ。國司権を重む。依之非職凡卑の目代等貞應以後の斬之の庄園を没擱て在廳官人檢非違使建兒所等過分の勢ひを高くせり。加之諸國御家人の称号は右大將頼朝の時より在て已し年久し武名も當御代に始て其号を被止めぬ。大名高家つら凡民の類は其憤り幾千万と知ん。次に天運國に應月て朝敵自ら亡びぬとて。今度天下を定めて君の宸襟を休め奉りし者も。義貞正成。回心長年。彼等が忠を取て漢の功臣に比せば。韓信張良蕭何曹參。又唐の賢佐。譬へ魏徵房玄齡。貞世南李如晦。李勣。其志一節に當り。美し向て忠を立る所。何れ先と。何を後とせん。その賞皆均く其爵是同じく處し。回心一人僅一本領一所の安堵を全して守護恩補の國を被召返事。其咎も何の故ぞや。賞中其功則有忠者

進罰當其罪。則有咎之者。退くとつ痛し。哉今の政道。只抽賞の功。不當讒のこゝろ。あは。無の論言の掌を翻を憚りあり。今若武家の中。棟梁と成ぬ。さき。実用の人物出来て。朝家を編し。申とあは。恨と含。政道と猜。天下の士糧を荷ひて。招ぎり集り。朝に向て弓を曳んと。不可有疑。抑天馬の用所と案。むり。徳の流行。むり。事ハ郵を置く命を傳ふる。より。速かれ。此馬必も。太平の御代。不足用。只謀叛大逆の輩。不慮に出来ん。日急と遠國に告る時。聊用ひ。得あ。ん。然れ。此馬静謐の朝。出て。兼て大乱の備に。設る所。と。豈是。不吉の表事。疾を。或。唯奇物の。讖ひを止め。ろ。ひ。千里の駿足。を本の國に。被歸。千里の外。仁政の化を。致し。ろ。ろ。不知と。誠を。至一言。を不。殘。諫奏を。被申。龍顔少。逆鱗の。気色。右。諸臣。皆色を。憂。り。ま。吉。酒。高。會。も。無。與。あ。其。日。の。御。遊。ハ。扱。止。ら。り。を。聞。え。藤。房。卿。ハ。御。遊。の。席。より。宿。所。に。歸。り。主。上。諫。め。を。用。ひ。不。給。と。逆。鱗。は。



くわく事と歎きあつせし時父宣房卿藤房卿の宿所より来りし。今日御遊の  
 席上の事と申被出で昔より今に至るまで諫臣身の全き事を不聞伍子胥  
 呉王と諫めて屈膝の劔を賜り比干の討王と諫めて其胸を裂る。何もう諫臣の功  
 を多し事ありや去人の質を矯るは法なりとつて我心を専らして志を遂んと  
 すくは還て愚しちの。不如天の後ひて心と伏し思ひを尽して忠貞を不失其身  
 を全ふまうこそ忠孝兩道の至りなれ諫言の下に死して養れを後世に残す  
 とも。父母の志しと不養して命を終らんと悲涙袖に満季房の配處して平法  
 めれむ。老後の愁ひ無詮方し汝亦君命に違ひる。老父が心如何とせん唯湯を採る  
 心と専らして諫を避身と全ふせん事。至孝あると涙を流して宣房藤房  
 卿は是唯子と愛する心よりして宣房所より忠臣の道にあらばと思ひし。老  
 り父に向つて返してご初るれば涙を流してひたり。嗚呼藤房卿今日君乃  
 威と不恐嚴顔を犯して義の當然とあまらうに宣ひし。實に忠良の臣なり其身

非勇の逆鱗と不顧して不可諫無智不可知非忠不可宣無義不可勇如斯智仁  
 勇忠義の賢臣内よりありて上の非を諫め。智仁嚴勇忠を兼備する正成外に  
 在て過を制するの。君用ひるをば。後の災ひとなりし事世以て恐るべし。  
 其後も藤房卿連続して強く諫を上りたりひたり。君少も御許容な  
 く。又何もの藤房が世に異なる昔事を申しし腹悪たれん。宣ひて跡閉食  
 も不被入結句藤房の物を評定され。朕が不徳を。何事も不被語  
 と宣ひ。諸事御隠密の事を。穴賢沙汰。藤房卿も且て知り  
 らる。邪事日々は積り。大内裏造営の事をも不被止。蕭蕭桂庭の御遊も  
 猶頓あり。藤房は是を諫め兼て臣の道我に於て至せり。今の身  
 を退るむ。あは不如此と思ひ定めて。坐し。三月十日の八幡の行幸。上を限。其の  
 路次の行粧と事と被為。藤房も時の天裡に坐し。上を限。其の  
 供奉と被思。其供廻り官人の出立目を。計り。粧し。看



督長十六人冠の老懸、袖單白くあつる薄紅の袍、白き袴を着、いづれも  
 乱水緒を履て列を曳せり。次、まて下部八人細烏帽子、上下一色  
 の家の紋の水子と着て二行、三行と続きたり。其次、時の大裡藤房卿卷縷者  
 懸、赤裏の表の袴靴の沓を履、詩繪の平朝の太刀を佩てあるの面の羽分  
 たる平胡藤の籠を肩甲斐の大黒とて、五尺三寸有る馬の太く、馬に騎懸  
 地の鞍を置、水色の厚総の鞆、唐糸の手繩のゆるゆる、結かけ鞍の上、閑  
 乗して、町、三處手繩を入らせ、小路餘て歩せり。馬副四人、平冠、楮の皮乃  
 尻朝の太刀を佩て左右を警固を。又かひ副の侍二人、烏帽子、花田の打緒を  
 其、隨ふ又單袖、水干着る舎人の雑色四人、白張、香の衣かぎ、終  
 り、重二人、其、統、並ぶ。其次、細烏帽子、袖單の白き上、海松色乃  
 水干着る調度、長六人、次、細烏帽子、香の水干着る舎人八人、其  
 跡、直垂着の雑人等百餘人、警、高らう、傍を拂、供奉せり。

たり。伏拜し、馬を留めて、雄山を登り、あつる。宋行時、有り、物有り、明日の  
 被、謂、我身の程も哀れ、石清水を見、つる可、澄、末の久しと、君の御  
 影、寄、奉、祝、其言、乘、引、替、今、心、の、垢、を、雪、め、浮、世、の、耳、と、可、洗、便  
 堅固、速、證、善、提、と、祈、り、り、を、和、光、日、塵、の、月、明、ら、う、心、の、商、を、や、照、と、んと、神  
 慮、も、暗、し、量、られ、御、神、拜、一、日、あ、つ、て、還、幸、幸、散、と、れ、自、是、疾、と、称、し、て  
 参、内、も、一、う、の、専、ら、遁、世、と、志、し、あ、ひ、ろ、れ、と、父、宣、房、を、始、め、北、の、方、も、露  
 語り、あ、つ、る、知、人、更、一、毎、り、り、唯、楠、正、成、一、人、の、此、御、世、を、遁、れ、と、隠、り、る、ん  
 とも。三十日、余、り、已、前、より、覺、り、知、り、深、く、歎、き、ら、う、と、聞、え、ら、る、

藤房月夜開談正成  
 藤房卿遁世隠跡

此時、兵部卿、護、良、親、王、の、猶、馬、場、殿、に、被、押、書、物、愛、月、日、と、送、り、せ、り、ひ、ろ、り、と、  
 主上も、流石、御、親子、の、愛、惜、あ、つ、と、世、の、そ、り、と、少、く、思、召、故、と、楠、正、成、を



可て宮を配流して直義を預け其候人等を誅して後の災ひを可断と思召  
 密に問せりひくれ正成謹んで顔に奉近自泪を流して申上り其下  
 賤りて自元愚う身と斯被召出條面目偏し身と余り矣所之去今勅  
 承て深く歎き度宮と云左様の御企あらん世の末に成らんとて存  
 て度次此宮御配所の事謹むて兼て度今君の忠を専らとる臣の中何  
 れう倭謀の企て可仕者あぶらん存不待然りとてども高氏兄弟が事  
 別く宮と御中不和と坐し侍れが自余の方へ御預の事可然と覺えぬ又良  
 忠以下の候人が死罪も先御内の大名共一人で御預け有て実否を被  
 死を賜はん何の難き事可侍か一ツも高氏兄弟が御誤りも侍ら  
 ば後代まで君の御誤りとも成侍らん第一宮は且て不知召宮の御心寄の面  
 々が申成らる事そや度やん宮への奉對朝家て全く非義の御坐さば度  
 上り。世上の沙汰多く聞えひらると奉申上られ君も実とや被思召らん

直義朝臣の方へ渡らるる高氏此由を聞て又奸謀を廻し准后(密に  
 被申入る。楠が申所其裡れ有様いふ。知謀の不足所ありと覺えひ此  
 宮の尋常の人へ御坐さば度宮の御心寄の人へ御預け有て若御番のうせ  
 不侍らば配所あり事の出来の事無疑又良忠等が死罪の事去恐る者  
 先と伴狂しく牢を抜出らるるも其心根を可被知召度緘中し生  
 てあらん如何針の愛を仕出可申度難計存度前々忠ありとて  
 今殺逆を免し事明らるる誅せむ侍らん云々業をかたりて  
 様々被申し。准后又便侍を以て頻々高氏が意を進めりひらる君  
 御心を被迷良忠以下の候人を誅し宮を直義朝臣の手へ渡り鎌倉  
 可有配流し事極りぬ正成此由を聞て深く歎息し貴賤上下にわが一族の  
 親しき者多き其家亡び今其子多門丸未だ幼少し一族す  
 らる。唯孤獨し。後の栄耀更し頼とありと被申さる。和田和泉守正遠



進之寄る我等は尤もさきまの事と存し其故は清盛子多くして天下の  
 大名皆清盛が子弟なりし故に頼朝孤獨より起て彼と亡し申候正成云  
 去は義朝の子餘多ありたる故に再び其家と與せり清盛の惡逆譬ふるや  
 のあり。子孫少く侍らむ一時其身を亡せしむ。子孫多きが故に一代  
 栄花をむらり其子孫繁々威びざりあり頼朝其子孫少き上り頼朝義經  
 と亡くし其甚く非あり夫故治世僅くして天下自然に北條に歸せり。今君  
 大塔宮の如き親むむを疎むるの事其身を刻りし似たり。恐らく此  
 君の御子孫正統を嗣ぐべきをえしむる事。然るに我家も子孫親族少  
 きも久しうばく亡ぶと涙を流して被申されば。和田正遠其外の親族  
 も共に落涙し及びたる。藤房卿も宮流刑の由を風聞し。弘通世の志  
 切ありんば。或夜の徒然に楠を召止成何事やんと急ぎ参り被申され  
 藤房卿今宵は月最清く面白ければ。和殿を借し。是を暫く月を詠じて

被語りて世の有様もこまかくと語りし。物語數刻し及び藤房卿  
 宣ひくらく実やんと大塔宮を直義承つて鎌倉へ奉りし其沙汰ありき。も  
 御身し忠有て不義ある人を斯申成事。世の乱近き。天下の政は准后の口へ落  
 し。高氏兄弟邪智賢くして准后しつひ君を欺き奉り。内心に天下を奪ふ  
 巧あり。諸國の士皆君を奉恨者多々れば。天下の高氏有とならん。義貞亦君に  
 恨を合し奉る上は義貞やまぐ朝敵とせん。何れも逆乱近きあり。  
 我賤し。臣として此危きを扶んとせらる。殿智浅ふく無御承引定め  
 天下の義貞高氏が間へ被奪り。今世乱れざる已前。身を退らばやと思  
 ふ。和殿の武士しあてし。朝の御大事に達て討死の外あり。むむと  
 思ふ。涙を流して宣ひく。正成も涙を浮へ。實に覺仕寄り。天下を他  
 人へ被奪候事。無念の至り。存侍る。如仰某の武士しついで討死の外別思ふ  
 事不侍候。誰も角こそと存候。卿も暫く世の成行らん様を御覽せ。



候へり。其朝家（そあそけ）のあつらひ程（ほど）易くし人（ひと）の被奪（ひだつ）申すも者（もの）ごとくありければ。藤  
 房御宣（のたま）ふ様（さま）尤思（おも）ひりひそ。和殿（わだん）の宣（のたま）ふ事（こと）を公家（くげ）の人（ひと）を兼引（せうりん）せられん（た）尤（な）もあり  
 ちん。邪道（よぼう）と専ら（せんら）しとて。和殿（わだん）の申（まか）さう（こと）を（こと）用（もち）ひり（か）ま（す）ど（れ）ば。天下（てんか）の高氏（たかぢ）義  
 貞二人（ごちん）の内運（うちん）一契（せき）ふ者（もの）の有（あ）る（べ）し。又諸国（しよこく）の武士（ぶし）君（きみ）の思（おも）ひ付（つ）奉（ほう）り（ま）間（ま）ど（き）り（り）。  
 和殿（わだん）如何（いか）しあめひり（り）。今（いま）も朝家（あそけ）の臣（しん）と称（せう）せり（り）内（うち）の諸国（しよこく）の武士（ぶし）不可（あ）随（ま）今  
 今（いま）も朝敵（あそてき）とあり（り）。天下（てんか）の士（し）皆（みな）奉（ほう）て和殿（わだん）に随（ま）ふ（べ）し。殿（だん）の名將（めいしやう）し物（もの）の心（こころ）を  
 能（よ）くありりひめり人（ひと）を兼（か）く覺（かく）申（まか）り（り）とて宣（のたま）ひり（り）。正成（せいせい）申（まか）様（さま）実（まこと）に天下（てんか）の  
 乱（みだ）と近（ちか）しと衣見（えみ）貴（き）御（ご）在（あ）りて折（し）々（々）君（きみ）の非（ひ）を諫（い）めり（り）をこそ。頼母（らいぼ）敷（し）存（ぞん）所（しよ）に貴  
 卿（きやう）已（い）し世（よ）を遁（のが）れり（り）上（かみ）の某（な）もとて陣死（じんじ）仕（し）やと思（おも）ひ切（き）り（り）互（たが）ひ心（こころ）の奥底（おくぞこ）を  
 語り合（あ）ひり（り）深（ふか）ぬれり。正成（せいせい）別（わか）れり宿所（しゆくしよ）に歸（かへ）り（り）日（ひ）を經（へ）て藤房（とうぼう）卿  
 致仕（ちし）の爲（ため）に参内（さんない）とせられり（り）龍顔（りゆうげん）に近付（ちかづ）り（り）今（いま）を限（かぎ）り（り）の夏（なつ）あられ（り）御  
 前（まへ）に程候（ほどこう）し。其事（こと）とて（り）此後（このち）の天下（てんか）政道（せいどう）の事（こと）を論奏（ろんそう）し（り）衣余（えいよ）所（しよ）奉（ほう）し（り）諫言（けんげん）

龍逢（りゆうほう）比干（ひかん）が誠（まこと）を尽（つ）し（り）諫（い）し（り）死（し）せり根（ね）に伯夷（はくゑい）叔齊（しゆくせい）が潔（けつ）き（り）と踏（ふ）み（し）餓死（がし）せり（り）  
 終夜（しゆうや）申（まか）出（で）て未明（みめい）に退出（しゅつだ）し（り）大内山（おほうちやま）の月影（つきかげ）も今（いま）を名残（なごり）に煩（わづ）ま（り）て涙（なみだ）を陰（かげ）り（り）  
 しく幽（な）ま（り）陣（ちん）頭（づ）より車（くるま）を宿所（しゆくしよ）に返（かへ）り遣（つか）し侍（しやく）一人（ひとり）召（め）具（ぐ）し（り）北山（きたやま）の岩藏（いわぞう）といふ  
 所（ところ）へ赴（おもむ）かれり（り）此（こゝ）に不二房（ふにぼう）と云（い）僧（そう）を戒師（かいし）に請（まか）り（り）遂（つひ）に多年（とんねん）拜趨（はいすう）の偏（へん）習（じゆ）と  
 解（と）し（り）十戒（じゆかい）持律（ぢりつ）の法體（ほふたい）と成（な）り（り）家貧（かひん）し（り）年老（ねんじやう）し（り）人（ひと）を（こと）難離（なんり）難（なん）  
 捨（す）思（おも）愛（あい）の奮（ふん）き（り）柵（さく）より（り）況（いは）や官祿（くわんろく）共（とも）に貴（たか）く（り）齡（ねい）末（ま）に四十（しじゆ）に不足（ふそく）人の妻（つま）子（こ）を  
 なく父母（ふぼ）を離（わか）れて山川（さんげん）抖擻（たうさう）の身（み）と成（な）り（り）少（す）き（り）発（は）心（しん）なり（り）此（こゝ）卿（きやう）の遁（にん）  
 世（よ）に依（よ）り（り）宿所（しゆくしよ）の騒（さわ）ぎ（り）あ（り）り（り）己（おの）に（り）敷（し）間（ま）に（り）達（た）し（り）君（きみ）異（い）の外（ぐわい）に（り）尋（たづ）ね（り）  
 り思（おも）召（め）て急（い）ぎ（り）其在（その）所（ところ）を尋出（たづな）再（また）政道（せいどう）輔佐（ほしよ）の臣（しん）も可（か）成（な）り（り）父（ちち）宣房（せんぼう）卿（きやう）に（り）作（しやく）せ  
 下（くだ）されり（り）宣房（せんぼう）卿（きやう）泣（な）き（り）此（こゝ）彼（か）と尋（たづ）ね（り）北岩藏（きたいわぞう）に坐（ま）り（り）由（よし）を問（と）ふ（り）急（い）ぎ（り）車（くるま）を  
 飛（と）り（り）岩藏（いわぞう）に至（いた）り（り）彼坊（かぼう）に行（い）給（たま）ひ（り）尤（な）様（さま）の人（ひと）やあり（り）尋（たづ）ね（り）ひ（り）至（いた）り（り）至（いた）り（り）  
 僧去人（そうきよ）の今朝（けさ）す（り）是（こゝ）に御座（ござ）候（こう）ひ（り）つ（り）此（こゝ）も尚都（しやうと）近（ちか）き（り）傍（たが）り（り）あれ（り）浮世（うきよ）の人（ひと）乃（すな）





藤房卿道  
 世隠跡



幸向うらむをてこてあれと。厭々被覚らん。行脚の志候とて。何地へやらん御出ゆひぬとて。答へたり。宣房御悲歎の泪を掩て。其住捨する庵室を見り。唯見よとて。書置まらん。破まらん障子の上。一首の歌とて被残らん。

任捨れ宿を浮世の人とて。荒や庭乃松よこたむ

棄思入無為眞實報恩者との下文の下

白頭望断萬重山 曠却思波尽底乾

不是宵中藏五逆 出家端的報親難

と黄檗の大義渡を題せり。古き頌を被書し。扱て此人設ひ何國の山ふありとも命の中の再會の叶ふまじうりたりと。宣房御恋慕の泪。咽で空しく。歸りて。抑宣房御と申す。吉田大貳資經の孫藤三。位資道の子也。此人困官の切。五部大乘經を一字三礼し。各寫し。供養て。子孫の繁昌を祈らむ。為る春日の社にて。被奉納らん。其夜の夢想。黄衣を

着る神人柳の枝。立文を付て。宣房御の前。差置れり。何ある女や。んと。燈。急ぎ披き。見ゆ。上唇。萬里小路。位殿へ。各て中。速證無上。大善授と金字。各々。夢覺。後静。是を案。我朝廷。任て。位一品。至らん。子。糸無疑中。見ん。金字の文。我則。此作善。以て。後。生善處の望と可達者也。二世の悉地共。成就。心地。憑。あり。ひ。果。元弘の末。父祖代。絶。後。位。成。ひ。中。ある。金字の文。子息藤房御出家得道。其善縁ありと。被示る。明。神の御告。誠。百年の栄耀。瓜前の塵。一念の発心。命。燈也。一子。出家。七世の父母。皆佛道。成。如来の所説明。此一人。一。の。衆。依。七世の父母。諸。成佛得道。其。衆。中の。悦び。宣房。御。終。第一の利生。預。智。あり。者。是。を。讚。歎。せり。是。叔置宣房御。内裏。歸。藤房の行。綱。あり。を。奏。せ。れ。



君も御後悔の気色見えさせり。其日の供御もつやく不被聞食。芳庭の御遊もまうり。楠正成ハ此由を以て。さき賢臣跡を隠し。いぬ定て出家や仕りひらむ。世の乱んと近きあり。我國死の期も遠く。深く歎息をぞしりける。

良忠以下誅候人

兵部御宮流刑鎌府

藤房御遁世の後ハ誰一人諫る者あらず。君弥准后高氏直弔が佞便不被。惑給ひ遂に兵部御親王と直弔が手し被渡刺(宮の候人三十余人を可誅)。勅宣下はる殿法印良忠。是を聞て大不意を最期に臨んで千種忠頭。脚し相見え申さる鳥の死せんとむる時其鳴声哀しく人の死せんとす。則其謂事要りといふ。兵部御の宮全く以て帝位を奪ひし。露計も不侍唯高氏兄弟が逆心を抱く。誅せんと思召所あり。彼が叛逆乃企あつて兼上同一達せし。此良忠あり。是以て余人にあらず。彼兄弟が

跡肉々野心と念をく。愷々りといふ。君御智恵の両眼准后の爲に盲なり。我等死を賜ふ事。御運も末に成らざり。覚のりあり。今見々三人三事を不遇して君。高氏が爲し傾けし。さうのむらあり。あゝ頼良忠君に奉被懸し。宮詰も。一肺肝を碎き。相州を傾けて王法本に帰せし。無甲斐十年を不遇して。武家の有らざる。口惜らぬ。我今毎実の罪に逢て死の。一命露程も惜む。あゝ此後君の御大事に可立者ハ。楠正成名和長年。借城親光菊地武重外ハ。君ハ其王。我ハ伍子。准后ハ西施あり。高氏世を乱さむ時。良忠ハ最期に斯申はる幸あり。妻しりて。勅勘を免さし。事を頼あり。世のくれたる。漸を又申さる。貴臣願くも良忠。一を捕殿(傳へる)世の乱に近き。覚み。去和殿朝家。御在れ。高氏兄弟恐る。不意。高氏此分。容易に乱を發さず。先諸国の兵の我身。随ふを待たず。又新田殿と御辺を准后へあり。一徳を失ひ可申。新田殿滅び被申あは。



必心而能中

其次の御辺の御身の上... 能く御要腹可有と申て... 溢して遂に首を刎らるる... 人三十余人被誅の上... 朝臣の方へ被渡され... 堂の谷土の窄を塗て... 外に着副進り... 御袖を被濡岩の滴... 内被思遣て悲... どのの沙汰あれ... 被奉るるを浅... 国失家幸古... 生次の男を重耳三男と夷吾と申るる三人の子已に長成て後母の齊姜死せ

献公歎之と切るり別の日敷漸遠く成るる... 魏姫といふ美人を迎ふ魏姫唯紅顔翠黛の迷眼... 心を蕩む。献公寵愛甚しく。年月を経程に魏姫亦子を生是と実齊と名付く... 献公魏姫に溺るる前の子を疎む魏姫が腹の子実齊に晋の国を與へんと... 賢愚更に見三入の太子を超て継此国事は是天下の可慮處也と言をか... 至る母墳墓を糸り其膝の余りを父に奉る。折節献公持て出てあはれ魏姫... 豚の中へ潜し鴆毒を入れて待献公持より帰て欲食之魏姫急ぎ止ての外より贈... れる物を試みざる事やあはれ庭ある雞と犬と典ある雞と犬と小籠まそ死... を献公大いおどき其餘りを地へ捨るる土穿て草木皆枯萎む魏姫偽る



新編竹園

泪と流し吾申生と思ふて美齊の不孝然るを我と憎之此毒を以て大平我を  
殺し早く晋国を奪むは其を以て思ふ大王百歳の後申生より我等  
親子を片時も生く置らざる願くは大王我を殺し美齊を失ふて申生を  
休めんと申すれ故に元来智浅なる故に此縁を信じて大に忿り則ち申生を  
死を賜ふ群臣皆申生の無罪に死に赴く事を悲しむ急ぎ他国に走り去り  
進められとも申生不聴し云我幼年の昔母を失ひ長年の今に継母に逢ふ  
是不幸の上妖命備まら抑天地の間何もの所より父子ありて固あらん今為  
道其死他邦にまらむ是れ父を殺さんとせ大逆不孝の者なり人毎に  
悪まれあが生て何の顔せらあらん吾不謀慮天知丈尺虚名の下に死して父の忿  
りを休めむある不如とて自ら劔を伏て空しく成ぬ其弟重耳夷吾の二人を災  
又我身し及ぶん事を恐る他國に逃れり二十六年の秋敵を卒して美齊晋の  
國を譲り受りしが十月其臣里射とら者美齊母子を殺して晋を亡し後重耳

國に歸り晋の社稷を保つ文公と云者是なり抑今兵革一時に定て先帝重祚を  
踐せり御幸始り兵部卿の宮の智謀に依り事なれば便ひ小過ありといふも  
誠めて可彼宥事ありと無是非彼渡敵人手彼處遠涼事朝廷再び煩さ  
て武家又可伴前表しやと皆人申合りて果し此宮被失させり此後各  
天下足利の世と成るがり牝雞の晨すうう家尽る相と古賢の云一言の  
未實もと彼思知しり

評云牝雞の雌鳥あり雌晨す時と告る則陰陽の理に及ぶる故に是を  
妖孽とて其家必も災有て索とつり今朝廷の政事准后の御口入り  
落て萬人眼を合む是牝雞の晨す何ぞ夫傾るらんや今内  
准后あり外に高氏直義あり君諛を信じて可親を疎く可惡を愛  
し藤房正成の如き賢者の諫を用ひらば誠して七國の崩あらんや  
去大塔宮にありて有功無罪銀ひ宮寧小罪ありとも南都熊野吉野





南北太平記圖會卷之十二終

を任て艱難の中、軍忠を抽てり。幸君已し志、何程の刑  
 小可及しあらん。況乎後者の口、信せ其罪の實否も、  
 和の敵人の手、被渡殿法印平賀三郎と始め忠良の候人三十余人を  
 誅せり。幸今の世、猶汗と握り、齒を嚙高氏直義、  
 へ罪あり宮を罪、萬乘の御子を土の牢、押参らする余忠逆  
 の超過不及論、何ぞ其世の忠臣命を捨て高氏兄弟、  
 根を断ざりしぞや。此宮、後高氏忽ち野心をあらはし君  
 是も猶御目を覺されむ。説倭を近付賢者を遠ざけり。故藤房  
 身を退き、正成終に決死し義貞、統て亡び天下自ら高氏、  
 然れ共正成精忠の余徳在て、正行正時正俊正勝正元輩朝野を守護奉る。固て  
 君の御子孫南方、五十余年の正統を嗣送る。事、後の三編四編精

皇漢洋今古書類自家積年發兌セル者ト其集  
 藏當ニ充棟載車ノ夥キノミナラズ品位精工價  
 程清廉以テ四方君子ノ愛顧ヲ待ツ

文榮堂藏版

東區南久寶寺町四丁目 八番地

阪府書林

前川善兵衛



